

「伊勢日記」を異本で読むということ

——〈共通テスト〉からのまなざし、もしくは授業改革への射程——

金井利浩

〈キーワード〉 共通テスト 伊勢日記 異本 授業改革

【目次】

一 偶合からのまなざし——「はじめに」に代えて——

二 「伊勢日記」とは何か、あるいは「伊勢日記」諸本とそのなかの二類本とについて

三 「伊勢日記」二類本の本文とその注解ならびに現代語訳

四 偶合からの射程——「おわりに」に代えて——

一 偶合からのまなざし——「はじめに」に代えて——

高大接続を視野に入れての（とされる）大学入試改革が（巷間での表現をそのままに用いれば）着々と進められ、かの「大学入学共通テスト」もその試行調査（プレテスト）が、国語についていえば二〇一七（平成二九）年一月と二〇一八（平成三〇）年一月との都合二回（二〇一八「平成三〇」年二月に、記述式問題の解答方法等に関する配慮のあり方について検討すべく、点字教育を受けた者を対象に試行されたのを含めれば三回）、すでに実施されたが、ここで触れるのは前者である。

同調査は、同年同月の一三―二四日に全国約一九〇〇校の高等学校が参加して実施され、二月四日（月）に、問題の全容・正

解表・問題用紙等が公開された。同日は、弊校では翌日から始まる期末試験を目前にして、授業担当教員の多くが慣例にしたがって試験範囲に係る授業内容の総括やそのうえでの質問への応答に一時時間をあてがってくれるものとの想定が、生徒には当然のようになされているであろうことが予見されるなか、稿者は二時間目、みずからが担任でもあるクラスの、その名も「国語演習」の授業であることをよいことにして、複写したばかりの同調査「国語」は第4問を、こんな問題もあるよ、と言いながら徐ろに配布しはじめ、二〇分で解いてみるよう指示したのであった。

記憶されている向きもあるであろう、第4問とは、古文領域からの出題で、『源氏物語』は「桐壺」巻の一節について、いわゆる青表紙本と河内本という二種類の本文と、その後者の成り立ちに触れた『原中最秘抄』の一節という、都合三つの古文テキストを示し、問いを立てたものであった。

さて、所与の時間が過ぎて鉛筆を擱いた、教卓至近の男子生徒がひと呼吸あって呟いた。「ボクたちがやってきたことと同じだね」。この「同じ」については、若干以上の説明が必要だろう。事情は、こういうことである。

稿者は、二〇一七年度、第三学年文系クラスの「古典B」ならびに他大受験文系クラスの古文・漢文演習を旨とする「国語演習」、さらに他大受験理系クラスのセンター試験対策に力点を置く「古典演習」を担当したが、年度開始に先立ってのシラバス執筆に際して、他大受験文系クラスでも履修することになる「古典B」での実践を企図したのは、いわゆる異本の読解であった。句読点や濁点、語によっては振り仮名までもが施された教科書所載の本文に対し、どこかに、それも自明のものとして存在しているにちがいないと考えがちな現代語訳を宛てがおうとし、宛てがえばそれで終了、それが「古典」の授業であり時間であると、あるいは決めつけ、あるいは見限っている生徒たちの認識や意識を、誤解を恐れずに敢えて率直に言えば、ぶっ壊したかったのである。未だ見ぬ「本文」は作るもの、作れるものであること、また、現代語訳は自明でも与えられるものでもないこと、それらに気づき、それらを知る、そこにこそ生徒ないし場合によっては愉快がともなう、そういう経験をとおして、「古文」と呼ばれるテキストを織り成す段落・文章・文の組成が、あるいは単語の意味や意味合いがおのずと理合される、そんな授業・時間の実現を庶幾したのである。そこで、対象に据えることにしたのが、「伊勢日記」と呼ばれるテキストであった。詳しくは次節で改めて述べるが、その二類本と通称される本文を主テキストとし、本文が整えられ注の施された一類本の注釈書を資料として、辞書や文法書あるいは三類本の現代語訳を併載した解説書等、ありとあるものを参照しつつ、その主テキストに句読点や濁点を加え、現代語訳を完成する――

これを当面の目標とする作業に、生徒たちは二人ないし四人の力をあわせて挑むことになったのである。

その作業の仔細や課題に係る報告については、すべからく他日を期したいが、果たせるかな、一年次・二年次にわたって「古文」に後ろ向きであった数名の男子生徒の口から、「そこに読点、必要?」、「こっちの『女』って、そんな人じゃないっしょ!」といった発語が一学期後半にのぼせられたのである。二学期に入り、そんな成果の積み重ねに手応えを感じる一方で、やがて明確に課題も見えてきたなかで授業も終盤を迎え、一定の総括に向かわんとしていた矢先、飛び込んだのが、公開された試行調査（プレテスト）であった。

まさか、青表紙本と河内本とに、『原中最秘抄』が合わせられるとは! 稿者は、驚きとともに、何を隠そう、異本併置という発想から始発した授業の的外れでなかったことに、私かな歓びを抱いた。第4問を解かせるべく複写している気持ちに、ある種の昂ぶりがあったことも否定できない。

かくて問題を解きおえた生徒には、青表紙本と河内本とは一類本と二類本と同位であり、自分たちは、『最秘抄』の書き手たる源親行と同列と意識されたのである。「同じ」とは、そういうことであった。

なお、彼ら彼女らが、やがて公開後の巷間で囁かれることになる、伝本（写本）間の違いをダイレクトに読み解かせる設問の非在への不満や疑問を、答え合わせを兼ねた解説の時間の段階ですでに呟いていたことを、ここに明記して紹介しておきたい。

さて、本稿は、「伊勢日記」二類本の注解ならびに現代語訳を江湖に晒そうとする。右に縷々陳べ来たったささやかな実践に挑むにあたって事前に用意した私的狭隘な小品を敢えて披瀝するのは、その実践としての授業を誇つてのことではもちろんない。その実践が、さまざまな意味やレベルで有用であると信じるからである。もつと言えば、「古文」と生徒との関係を構築するうえで、必ずや有効であると信じるからである。もしも「共通テスト」に対しても有効にはたらくところありとすれば、それは、センター試験に代わるその新テストそのものが願い、狙い、目指すところがそういうものであるからであらう。

改めて「伊勢日記」そのものに引きつけて言えば、一類本は名著『伊勢集全注釈』が刊行されて、縦横無尽に読み尽くされた感がある。対するに、二類本は未開である。その開扉に向けて、という文脈においても、是非ともその実践のための具としてほしい、と願う。とはいえ、授業者各位の手控えとするには、不備や誤読がさぞ多かろうと案じている。その意味では、むしろ、授業者と受業者とが協働ないし競闘して「伊勢日記」二類本の表現世界を解読するための、まさに叩き台にいただければ幸いである。

二 「伊勢日記」とは何か、あるいは「伊勢日記」諸本とそのなかの二類本について

では、何はさて、ここで「伊勢日記」の何たるか、またその諸伝本（諸写本）の如何について、輪郭を描いておきたい。

「伊勢日記」とは、歌人伊勢（八七四ころ〜九三九ころ。藤原繼蔭「伊勢守。のち大和守」女。宇多・醍醐・朱雀朝において、殊に屏風歌を多く詠進したほか、歌合等にも出詠するなど、女流随一の晴の歌の作者。『古今和歌集』初出。三十六歌仙の一人）の家集『伊勢集』冒頭、三十余首の和歌が歌物語ふう組織されている部分の謂いである。その呼称は、伴信友『表章伊勢日記附証』（天保四年）をもって嚆矢とする。信友が当該部分を後続家集から切り離してそう名づけたのは、それを「仮名書の祖ともいふべきふみ」と認定したからであった。

さて、その輪郭は、次のごとくである。「大御息所」（仮に史実に還元すれば、宇多天后温子に比定される）なる主人に仕えた「女」（同、伊勢）は、「男」すなわち御息所の弟（異母弟藤原仲平）と結ばれたもののその恋に破れ、「親」（藤原繼蔭）の任地たる大和国にくだつて寺めぐりに傷心を癒した。やがて御息所の仰せにしたがい再び出仕したのち、「男」の兄（時平）や別の男たち（平定文など）に言い寄られるも応ぜず、ついに「時の帝」（宇多天皇）の寵愛をうけ皇子を産んだ。しかし、その時をいわば頂点とするかのように、帝はやがて退位しまもなく出家、皇子は夭折、悲歎に堪えながら宮仕えに専心するも、ついに主君御息所（この時すでに中宮）にも先立たれる――。

この「伊勢日記」を、信友は伊勢その人の手になるものと考え、さらに、それを冒頭に据える総体としての『伊勢集』の編纂をその女中務（九二二ころ〜九八九ころ）の所為と推定したのもあったが、むろんその確証はない。というよりも、こんにちでは、伊勢本人としては到底ありえないはずの筆致や史実離れが存することをもって、自記説は一蹴されるくらいが強い。しかし、自身の歌うたを編む＝「書く」という行為が、自身の一度きりの生を生きなおす方法であったとすれば、もとより実人生の記録性や史実を問うべくもなく、改めて、伊勢の歌うたをもって組成された世界の読解をとおして「女」の人生をさぐることが要請されているのだと言えよう。その意味で、歌うたを編みなおす＝「書く」という行為の結果した「作品」という枠を、ひとりの「女」の「生」の装置とした「伊勢日記」の、後続のいわば本格的な日記文芸の嚆矢としての位置どりには、なおも揺るぎはない。

また、本作が「女」ととしての主人「大御息所」への恩顧（あづか）を顕し、主人の徳を語ってもいる事実は、本作を女房日記の流れのなかに置こうとする視点をも可能にする。その意味で、「伊勢日記」は、女房日記から女流日記文芸へという命題を、すでに先駆的に内包していたのだとも言えよう。

ところで、『伊勢集』諸本は、一類本（西本願寺三十六人集本系）、二類本（群書類従本系）、三類本（定家本系。正保版歌仙家集本系とも）の三系統に分かたれる。そもそも歌数において、順に四八三首、五一八首、五一三首と差異があるほか、歌の排列の相違や脱落など異同は枚挙に遑がない。それは冒頭の「伊勢日記」部分についても同断である。

前節でも少し触れ、次節の凡例にも掲げるとおり、新大系や『伊勢集全釈』、さらには『伊勢集全注釈』といった、こんにちの代表的・本格的な校注本・注釈書が概して一類本の代表たる西本願寺本を底本に選定し、第三類の定家本についても、片桐洋一『恋に生き 歌に生き伊勢』や清水好子『王朝女流歌人抄』といった、現代語訳を付載する解説書によって理解が進んでいる状況に鑑み、また、しかるべき位置に長歌を有する一点を重く見て、前述したごとく、授業では敢えて二類本をとりあげることとしたのであった。

さて、次節では、いよいよその注解と現代語訳とを問う。

なお、年間の授業を展開するに先立っては、注解と現代語訳とのほかに、稿者なりの〈読み〉をしたためた「補説」をも準備したが、本稿では、許された紙員との兼ね合いから、全面的に割愛に従わざるを得なかった。機会があれば、別稿を用意したいとかながえている。

三 「伊勢日記」二類本の本文とその注解ならびに現代語訳

〔凡例〕

一、本稿は、『伊勢集』のいわゆる二類本のうち、宮内庁書陵部蔵の禁裏本（実隆本系）を底本として、その冒頭の、俗に「伊勢日記」と呼称される部分を翻刻し、注解を加えるものである。直接には、古典研究会『私家集 集抄一』（汲古書院 一九六九）に拠り、仮名・漢字は現行のそれらをもって掲出した。

二、本稿の構成は、本文を記事としてのまとまりのある長短十四章段に分け、（一）～（一四）の各見出しに続けて掲げ、その後に注解を示し、さらにそれを承けて上段に釈文（校訂本文）を立て、下段に現代語訳を付した。

三、注解は、現代語訳の根拠たりうるところを示した。なお、○印を冠して掲げる見出し語句は、本文の表記による。

四、釈文（校訂本文）は、注解を経て現代語訳に至る根拠としての表記をもつてする本文であると同時に、注解と現代語訳とを経て還り戻る原点としての本文でもある。すなわち、本文の仮名に漢字を当て、漢字を仮名にひらき、仮名に濁点を加えることがあるほか、歴史的仮名づかいに改めたり、句読点や

振り仮名等を実施したりしたものを取めた。なお、和歌には通し番号を付した。

五、現代語訳は、釈文（校訂本文）の意味するところを現代日本語表現をもつて示した。なお、和歌に対応するところには、和歌に対してのと同じ通し番号を付した。

六、学恩を忝うした、また折々に引く諸家の御著は、左の略称ないし著者姓氏をもつて示した。

秋山『形成』	秋山虔『王朝女流文学の形成』	塙書房	一九六七
秋山『伊勢』	秋山虔『炎、秘めたり 伊勢』（王朝の歌人 5）	集英社	一九八五
片桐『伊勢』	片桐洋一『 恋に生き 伊勢』（日本の作歌 7）	新典社	一九八五
『歌人抄』	清水好子『王朝女流歌人抄』	新潮社	一九九二
『新大系』	平野由紀子『伊勢集』（新日本古典文学大系 28 のうち）	岩波書店	一九九四
『全釈』	関根慶子・山下道代『伊勢集全釈』（私家集全釈叢書 16）	風間書房	一九九六
『大系』	高野晴代『伊勢集』（和歌文学大系 18 のうち）	明治書院	一九九八
『全注釈』	秋山虔・小町谷照彦・倉田実『伊勢集全注釈』	角川書店	二〇一六

（二）柿の紅葉とねずもちの紅葉

いつれの御時にかありけむおほみやす所ときこえける御つほねに大和にをや有ける人さふらひけりおやいとかなしうしてを
とこなともあはせさりけるをみやす所の御せうとしころいひわたりたまひけれとしはさらにかきさりけるをいか、あ
りけむおもひつきにけりをやいかにいはむとなけきわたりけるをとしかへりにければき、つけてけりされとすぐせこそは有
けめとてことにいはさりけりた、わかき人はたのみかたきものをとそいひけるほとに時のおほいまうちきみにむこにとられ
にけりそのおりにそをやもされはよといひければ女はつかしと思ほとに此おとこのもとより人きたり此女の家は五條わたり
なるにきてかきのもみちに哥をなむかきつけ、る

後八批把左大臣
人す

すますあれたるやとをきてみれば今そもみちの錦をりける

女心うきものからあはれにおもほえければ

泪さへ時雨にそひてふるさともみちの色もこさそまされる

とてねすもちのもみちにつけてそやりけるおとこいとおかしとおもひけり

○いつれの御時にかありけむ どの帝の御代であつただろうか。一類本の「寛平みかどの御時」との表現の異同・対立をめぐっては、つとに議論のあるところだが、今日的には、「いづれ」に付された傍注「寛平帝／寛平みかど」の本行本文化したものが一類本の形姿である、との了解にはば収斂しつつある。一方で、一類本をもって最も古態を残すとする認識は、いきおい「寛平みかどの御時」を原形とする立場をなお良しとするかに思しい。けれども、一類本を総体として古態をとどめると認め得るとしても、その総体をなす部分たちのすべて、語や句の一切を等しく古態とは見做し得ないことは、言うまでもなからう。そもそも、「寛平みかどの御時」なる表現は、どこまで本来的であつたろうか。「朱雀院の御時」（中務集）、「三条院の御時」（伊勢大輔集）、「寛平の御時」（素性集）、「延喜御時」（躬恒集）といった諸例に照らして、やはり異例とするほかなかつたのではあるまいか。すなわち、「寛平みかど」とは、いかにも、原姿「いづれ」に当てられた傍注と見るにふさわしい体なのであつた。翻つて、「いづれの御時にかありけむ」は、かの『源氏物語』は桐壺卷冒頭の「いづれの御時にか……」という表現と類似した形姿であるという一点において、あるいはまた、歴史的時空間の或る一点へと読み手の感興を誘う、然るべき言葉の力を宿していればこそ「寛平みかどの御時」なる傍記を招来したのだという意味合いにおいても、相応の価値を有する表現であつたと評せよう。ちなみに、「寛平みかどの御時」の「寛平」とは、宇多朝の元号で、八八九年から八九八年まで。また、宇多天皇（八六七～九三二）の在位は、仁和三年（八八七）八月から寛平九年（八九七）七月まで、であつた。○おほみやす所ときこえける御つほねに 大御息所と呼ばれていた方のお住まいの御局に。「御息所」は、天皇の后妃である女御や更衣の敬称で、特に皇子や皇女を出産した場合に用いることが多い。「大」を付けたのは、敬意を強調したもの。「聞こえける」は、語り手の「大御息所」に対する敬意。史実に照らせば、太政大臣藤原基経女温子（八七二～九〇七）を指す。温子は、仁和四年（八八八）に入内し、女御となつた。寛平二年（八九〇）に均子内親王を出産し、同八年に麗じた藤原胤子腹の皇太子敦仁親王の養母となり、翌九年に親王が醍醐天皇として即位するに従つて、皇后位（中宮、皇太夫人）を授けられた。東七条宮（後の亭子院）に住んでいたので、七条后と呼ばれる。「局」は、一般には女官や女房の私室を言い、ここは温子の御殿内を仕切つて設えられた、とある一部屋を指す。ただし、『全釈』は「ここでは、后妃の居住する宮中の殿舎のこと」とし、『大系』も「御息所の御殿」とする。○大和にをや有ける人さぶらひけり 大和に親のいた人が御局にお仕えしていた。「大和」は畿内五国の一つ。いまの奈良県。その「大和」を赴任先としていた「をや」とは、藤原継蔭。その室については五条の御かとする説もあるが未詳。さて、「大和にをや有ける人」こそは、ほかならぬ伊勢に比定される。ちなみに、「伊勢」との候名が、仁和元年（八八五）八月伊勢守、寛平三年一月大和守となつた（『古今和歌集目録』による）父継蔭のその任官の事蹟によるとすれば、伊勢の出

仕は継蔭の伊勢守時代のこと、すなわち温子の入内時か、その後まもなくのことであろう。ところで、「人」との客体表現に意を留めるべきだろう。「時」(時代)―「大御息所」(後宮)―「人」(人物)と引き絞られてゆくなかから自ずと「伊勢」が同定されてくる行文のありようを味わいたい。それは、この後に展開する、ある一回性の出来事が、この三者によって織りなされることを、明瞭に告げ知らしめているのである。○おやいとかなしうして 親はたいそうかわいがって。「かなしうす」は「かなしくす」のウ音便形。「かなしくす」は、形容詞「かな(愛)し」の動詞化したもの。可愛がる、いとしく思う、の意。親は伊勢を心底から愛し、大切に育てていたのである。○をとこなもあはせさりけるを 若いさかりの男などはめあわせなかったところ。一類本の伝える「なべての男」が、平凡なつまらない男をいうのに対し、「をとこ」は、ひろく、成人した若い盛りの男性を指す。「あはす」は、娶^{めあ}せる、縁づかせる意。「あはせざりける」には、研究史の指摘した、わが娘が帝の寵愛を拝するやもしれぬとする親の願望と、より基底的な意味での親の娘に対する鍾愛^{しゅうあい}ぶりとの両義がこもる。少なくとも、親は地位や人柄のすぐれた男と結婚させようと思っていたのであろう。○みやす所の御せうと 御息所の御兄弟。史実に徴すれば、温子の弟、藤原仲平(八七五―九四五)である。仲平は基経二男、温子の異母弟で三歳年下。後の枇杷左大臣。そもそも「せうと」は、男の側から姉妹を指して言う「いもうと」に対して、女の側から兄弟を言う語。いずれも、年齢の上下は問わない。○としころいひわたりたまひけれと 長いこと求愛しつづけていらしたが。「としごろ」は、時間的な経過を示す。「いふ」は、ここでは言い寄る意。「わたる」は、時間の継続を表わす。○しはしはさらにきかさりけるを しばらくの間は求愛にまったく聞く耳を持たなかったのに。「さらに」は、下に打消の語を伴って、全く…ない、決して…ない、の意。○いか、ありけむ どういう経緯であったのか。語り手(書き手)は、主人公の「人」の心の動きに対して、何があったのか、どうしてそうなったのかと、不審を差し挟むのである。○おもひつきにけり 心が引かれるようになった。「おもひつく」は、好意を寄せる、心が引かれる、の意。何故か、「人」の心境に変化が生じたのである。「…にけり」には、語り手本位の負のニュアンスがこもる。○をやいかにいはむとなけきわたりけるを 親が何というかと悲歎しつづけていたが。「なけきわたりける」の主語は、「人」。主人公は、「をとこなもあはせざりける」親の反応を危惧したのである。若干の時間が経過して、親も事情を知るに至ったのである。○としかへりにければぎ、つてけり 年が改まると、聞き及んだのであった。「としかへる」は、年が改まること。時間が経過したことを言い表しているのである。「日記文学」と把握するに足る、語り手の時間への意識の厳存をここに思い合わせたい。「ききつく」は、小耳にはさむ、聞き及ぶ意。親が事情を知るに至ってしまったというのである。○されとすくせこそは有けめとてことにはさはりけり けれども、そうなるはずの前世からの因縁があったのだらうと観じて、特には何も言わなかった。「されど」は、だが、主人公が予期・危惧したところに反して、意外にも、といった語感である。「宿世」は、前世からの宿縁。「すくせこそは有けめ」とての「とて」は、親の、娘の宿命に対する諦観をかたどる。「ことに」は、殊に。下の「…ざりけり」と呼応して、特に…なかった、の意を作る。多言を弄さぬ親のありようは、因果思想に基づく一般的な反応と言ってしまうばそれまでだが、かわいさゆえにその辺の男とはめあわせまいと願い、かわい

さゆえに何も言うまいと堪^{こた}える、娘を鍾愛する親の常をも思い合わせたい。○たゝわき人はたのみかたきものとそいひけるほとに　ただ、若い人は当てにしにくいがなあ、とだけは言っていたちようどそのころに。「ただ」は、あとの「…とぞ」と結んで、ただ…とだけは、のニュアンスを形成する。親は、諦観から特に何も論しはしなかったが、ただ一点、「…」とだけは言っていた、というのである。「わき人はたのみかたきものを」は、若い人は、信頼しがたいの。親は、若い男がとかく気まぐれで、当てにならないことが心配だったのである。「ものを」は終助詞で、逆接の気持ちを含む詠嘆を表す。…のになあ。「ほどに」は、時間の経過や時間の程度を表す。○時のおほいまうちきみにむこにとられにけり　御息所の弟君（仲平）は、当時の大臣に、婿として取られてしまった。時の大臣には左大臣源融^{よる}（八二二・八九五）・右大臣藤原良世^{よしの}（八二四・九〇〇）が就いていたが、いずれも七〇歳を越える高齢で、宇多天皇の信任の極めて厚かった源能有^{よあり}（八四五・八九七）が、事実上の政權担当者として寛平の治を推し進めたと考えられており、その能有をもって、ここでの「時のおほいまうちきみ」に比定する説が有力である。ちなみに、伊勢と仲平とが恋に落ちたとおほしい寛平二年（八九〇）当時は、能有は正三位中納言であり、実際に大臣に昇るのは、寛平八年（八九六）になってからである。○そのおりにそをやもされはよといひければ　仲平の大臣家への婿入りを耳にした時には、さすがの親も、やはり思ったとおりだ、と言ったので。「さればよ」は、予想や不安がそのとおりになった際の感懐を表す常套句。やつぱり。思ったとおりだよ。○女はつかしと思ほとに　女（伊勢）が親にあわせる顔がなく気まずさを抱えこんでいると。親の明察をそれとして受け容れてこなかった自らの判断や行動を、「女」は大いに省みたのである。なお、「大和にをや有ける人」が「女」へと変換されたことに留意したい。仲平という若き「男」にいわば捨てられた今ここから、本作の中を「人」は「女」として生きていくことになったのである。○此おとこのもとより人きたり　その男（仲平）のもとから使者がやって来た。ちなみに、一類本では、「この男のもとより…男の…来て」と、男みずからが女の家を訪う文脈を形成している。○此女の家は五條わたりなるにきてこの女の家は五條の辺りにあったのだが、そこに男の使者は来て。「女の家」は、女の実家、ということであろう。それはすなわち、言うまでもなく、「男」のかつての訪い先^{わたり}であった。○かきのもみちに哥をなむかきつけゝる　使者は、柿の紅葉に、ほかならぬ「男」から託された歌を書き付けた。「かきのもみち」は、「かきつけける」との表現に素直に従うかぎり、一首の歌を書き付けるに足る、一定の大きさを持った「柿」の紅葉した葉、とするほかないだろう。ただし、同じ二類本の中でも、知られるとおり、たとえば飛鳥井雅子筆本には「墻の紅葉」とあって、『全釈』や『新大系』はそれに従って「垣の紅葉」と解する。さらに『全注釈』などは、「歌を柿の葉に直接書きつけたか」としつつも、『全釈』『和歌大系』のように、歌を書いた消息を垣紅葉の折枝に付けて贈ったと解する説もあり、現実の場を想定すれば、そのほうが受け入れやすい」と説く。○人すますあれたるやとをきてみれば　人が通わなくなつて、荒廃してしまつた邸を訪ねてみると。「すむ」は、男が女のもとに通う意。「やど」は、由来、「屋外」また「屋戸」、すなわち庭を含む家を言う。歌ことばとしての「荒れたる宿」は、男の通いが途絶え、独り取り残された女がひそやかに暮らす、「嘆き」・「憂き」という木や「憂き」という深草が繁る場所であり（平野美樹「荒

れたる宿」考（『中古文学』第六十三号、一九九九年五月）参照、「運命を慨嘆する女にふさわしい道具立て」（三田村雅子「門」の風景」（『枕草子 表現の論理』一九九六年、有精堂）所収）でもあり、さらには、であればこそ、男が心にかけて訪れるべき場所であり、心を惹かれて訪れるはずの道具立て（平野前掲論文参照）であった。○今そもみちの錦をりける ちようど今、紅葉の錦を織りなしているよ。「男」は、「女の家」における、「なげき」や「うき」から遠く乖離する「にしき」の厳存を指摘する。「もみちのにしき」は、紅葉の美しさを錦に見立てていう語。○女心うきものから 女は鬱々としてしまうものの。「男」がこうして歌を届けるだけの思いを残しながら、「時のおほいまうちきみにむこにとられ」てしまっているという現実を前に、「女」には、おのが身の不運が情けなく思われてならないのである。なお、「心うし」は、自分をめぐる状況や事柄に対して感じる憂鬱な感情、また、人の言動について自分の心が屈するようないやな感じを表す。○あはれにおもほえければ しみじみと感じ入らざるをえなかったのだ。「時のおほいまうちきみにむこにとられ」ながらも、こうして歌を届けてくれた「男」の思いに、「女」の心はおのずと揺れ動いたのである。「おもほゆ」は、一類本の作る「おほゆ」の古形。○泪さへ時雨にそひて 涙までもが時雨に加わって。「時雨」は晩秋から初冬にかけて降るにわか雨。『万葉集』『古今集』いずれにおいても、秋のものとも冬のものとも定まっていない。あるいは木々を染め、あるいは紅葉を散らす、とされる。○ふるさととは ここ古里では。「ふるさと」とは、「女」が宮仕え前に住んでいた実家であることの謂いであるとともに、かつて「男」がひそかに通ったことのある、いわば過去の空間であることをも示している。その「ふるさと」の語に、動詞「降る」が掛かっている。その主語は「泪」である。ただし、それはただの「泪」ではない。紅涙とも言われたそれは、通常の涙が涸れた果てた後になお溢れる、心底からの悲しみに由来する涙である。○もみちの色もこさそまされる 血の涙で染まったことで、紅葉の色はその濃さが増したのだ。「女」の、古里の庭の木々が鮮やかに赤く美しくあるのは、あなたに捨てられ絶望の果てに流した血の涙が降りかかりつづけたからなのだ、との訴えである。○とてねすもちのもみちにつけてそやりける と詠んで、ねすもちの、葉が紅葉した枝に付けて返した。「ねすもち」は、モクセイ科の常緑低木であるネズミモチ、あるいはモチノキ科の常緑低木であるイヌツゲ。常緑であることと「もみち」との矛盾齟齬が取り沙汰されるが、問題視するには及ぶまい、というよりも、問題視すべきではあるまい。常緑のねすもちさえも紅葉させてしまうほどの紅涙を流したためという、悲痛・切実なメッセージを「女」はその一本の枝に託し込めていたのだ、と読まねば、少なくともこの二類本を読んだことにはならないだろう。○おとこいとおかしとおもひけり 男は、実に巧い、と思った。「女」の、詠歌における繰り返し、文付枝の選定、その両々に、「男」は感心したのである。

（一）柿の紅葉とねすもちの紅葉

いづれの御時にかありけむ、大御息所と聞こえける

おほみやすじろ

どの帝の御代であつただろうか、大御息所と（世に）申し上げ

御局に、大和に親ありける人さぶらひけり。親いとか

なしうして、男なども会はせざりけるを、御息所の御せうと、年ごろ言ひわたりたまひけれど、しばしはさらに聞かざりけるを、いかがありけむ、思ひつきにけり。親いかに言はむと歎きわたりけるを、年かへりにければ、聞きつけてけり。されど宿世こそはありけめとて、ことに言はざりけり。ただ「若き人はたのみがたきものを」とぞ言ひけるほどに、時の大臣に婿に取られにけり。その折にぞ、親も「さればよ」と言ひければ、女、恥づかしと思ふほどに、この男のもとより人來たり。この女の家は五条わたりなるに來て、柿の紅葉に歌をなむ書きつけける。

1. 人住まず荒れたる宿を來てみれば今ぞ紅葉の錦織りける

女、心憂きものから、あはれに思ほえければ、

2. 涙さへ時雨に添ひてふるさとは紅葉の色も濃さぞ増される

とて、ねずもちの紅葉につけてぞやりける。男、いとをかし、と思ひけり。

（二）女、大和へ

— 女いまはわれをはよもとは思て大和へくたるとておとこのもとへやりける

た（方の御殿の）御局に、大和に親のいた人がお仕えしていたのだった。（その人のことを）親はとても大切に慈しんで、婚期に

ある若い男などとは縁づかせないでいたところ、御息所の弟君が、長らく求愛しつづけなされたのだが、その人はしばらくの間は全く応じなかったのに、何があつたのだろうか、好意を寄せるようになってしまった。（そこで、その人は）親が何と云うだろうと苦しい溜息を洩らしつづけていたのだが、年が改まってみると、（親の）聞き知るところとなつてしまった。ところが、ほかでもない前世からの因縁があつたのだろうと（親は）観じて、特に口に出して何か言うことはなかった。ただ、「若い男はなかなかあてにはならないのに」とだけ言つていたそのやさきに、（御息所の弟君は）時の大臣によつて、婿にとられてしまった。さすがにその時には、親も、「だから、ほら」と言つたので、女は体面が保てずにつらいと思つていると、当の男のもとから使いがやつて來た。この女の家は五条あたりにあるのだが、そこに來て、柿の紅葉に、（男から託された）歌を書き付けたのであつた。

1. 私が通わなくなつて荒んでゐるはずのお前の邸を訪うてみると、今まさに紅葉の錦が織りなされていたことよ。

2. 女は、つらく情けなく思うものの、じわり心動かされたので、（あなたに見捨てられたゆえに）血の涙までも時雨に加わつて降るこの古里では、紅葉の色もとうぜんその濃さが増したのです。

と詠んで、ねずもちの紅葉に付けて送つた。男は、たいそうやるな、と思つた。

三輪の山いかにまぢみむとしふともたつぬる人もあらしとおもへは
をとこの返し

もろこしのよしの、山にこもるともおもはむ人にわれをくれめや

おとこのもとより

後十批肥左大臣
世をうみのあはときえぬる身にしあればうらむることそ数なかりける

ならさかにをひておこせたりける

同、返し
わたつみとたのめしことのあせぬれはわれそ我身のうらをうらむる

○女いまはわれをはよもととはしと思て 女は、今となつては男が自分のところになど通ってくることは万が一にもないだろう、と思つて。「よもととはし」は、「よも訪はじ」。「よも」は副詞。下の打消推量の助動詞「じ」と呼応して、まさか（…ないだろう）、いくらなんでも（…ないだろう）、万一にも（…まい）。○大和へくたるとて 大和へ下向するということで。先に、「大和におやありける人」とあった。すなわち、父親がかつて大和を任地としていたわけで、あるいは「女」も一時をそこで過ごしたことがあり、大和下向は、ゆえに「女」に一定の土地勘があつたことによるものか。○おとこのもとへやりける 男の許へ贈つた歌。「女」は、大和への下向を決意するに及んで、自分のほうから詠んで「男」へと贈らずにはいられなかつたのである。○三輪の山 三輪山よ。「三輪の山」は、そのものが大神神社のご神体である。三輪山の神が素姓を隠して女のもとに通つたという三輪山神話が伝わる。ほかならぬ神の訪れであるうえは、女は常に「待つ」存在であり、殊に、「わが庵は三輪の山もと恋しくはとぶらひ来ませ杉立てる門」（古今・雑下・九八二）と詠まれて以降、三輪山は「待つ」との表徴的空間になつた。「女」は、その三輪山に向かつて呼びかけるのである。○いかにまぢみむ どうして待つてみることなどできるでしょうか。「いかに」は、物事の程度・状態・理由などを疑いの気持ちで推量する意をあらわす。ここは理由を推し量りつつ疑問を投げかける文脈で、どうして（…か）。「む」は、可能推量。…できるだろう。なお、「まぢみる」は、「（ためしに）待つてみる」の意。初句が「三輪山を」や「三輪山で」でない以上、「待ち、見る」とする理解は採らない。○としふとも 何年たつても。何年待つたとしても。「女」のするその仮定は、「男」の訪いの実現するその日まで待ちつづけたと思ふ未練の残存を、逆説的に証し立てていよう。少なくとも、「女」は何年かは大和に留まるつもりでいる。○たつぬる人もあらしとおもへは 訪れる人などいるまいと思ひますのに。言うまでもなく、地の文の「いまはわれをばよもととはし」に対応し、響き合う。なお、「おもへば」は、諸注一致して「思うので」と順接で捉えるが、「いかにまぢみむ」へと返つてゆく文脈にあつては、逆接に従わねば、「女」の心の理解として浅薄であらう。○をとこの返し 「男」の返事。

「男」からの返歌。○もろこしのよしの、山にこもるとも 中国の吉野山に籠もるとしても。「男」は、「三輪の山」と同じ大和に存する「吉野の山」に敢えて「もろこしの」を冠するという誇張表現に、「女」への思いの強さを込めたのである。○おもはむ人に 私を思い慕ってくれる人に。「む」はいわゆる婉曲。その基本的な意味が推量にあったことを考え合わせれば、「おもふ」主体は「男」ではなく、「男」の相手である。○われをくれめや 私は後れるだろうか、遅れはしない。「男」は、どこまでも「女」の後を追ってゆくというのである。○おとこのもとより 「男」のところから。「女」の反応が無いことに耐えかねて、といった恰好である。○世をうみの 世の中に嫌気がさして。「世」は、むろん、男女の仲とも解し得るが、「男」の一首総体の言い放ち方からは既にその域を超えた気味合いを感じ取るべきであろう。「うみ」は、「海」に、嫌になる意の「倦み」を掛ける。「おほかたは我が名もみなと漕ぎ出でなむ世をうみべたにみるめ少なし」(古今・巻第十三・恋歌三六六九／よみ人しらず) など。○あはときえぬる身にしあれば 沫のように消えてしまふ、はかなくつらい身なので。「あはときえぬる身」の発想は、たとえば「流れての世をもたのます水の上の泡に消えぬるうき身と思へば」(後撰・巻第十五・雑一・一一一五／大江千里) など。○うらむることぞ数なかりける 浦ではないが、恨みに思うことが数限りなかったことだ。「うらむる」は、「恨むる」に「浦」を掛ける。「数なかり」は、形容詞「数なし」の連用形。数えられないほど多い、の意。○ならさかにをひておこせたりける 「男」は「女」を奈良坂まで追って、そこからこの「世をうみの」の歌を送ってきたのであった。書き手(語り手)は、「もろこしの吉野の山」なる表現が、一見、「女」への愛情の深さを訴えたもののようでありながら、結局は「男」の壮語でしかなかったことを暴いているのだ、とも見られよう。なお、「ならさか」は、山城から大和への途次、奈良山を越えるにあたって通る坂道で、山城側から見れば、旧都奈良への入り口に相当する地点である。翻って、「男」が追ったのは、その程度の所までであったということである。○わたつみと 海と。海のように。ゆらい、「わたつみ」の「わた」は海、「つ」は「の」の意の古代の格助詞、「み」は霊・神の意である。やがて、海の神のいる所、の意から、派生的に「海」を意味するようになった。なお、「わたつみと」の表現が、海の「広さ」に係る文脈を導くのか、「深さ」のそれかは、歌によって区々である。○たのめしことの あてにさせたあなたの言葉が。下二段活用「たのむ」は、約束などをしてあてにさせる、頼みに思わせる、の意。「今ははや恋ひ死なましをあひ見むとたのめしことぞ命なりける」(古今・巻第十二・恋歌二・六一三／深養父) など。○あせぬれば 浅くなってしまうたので。「あせ」は、「浅す」の連用形。「伊勢の海は名残だになくあせにけり名のみたかしの浜と聞こえて」(元輔集・八一) など。○われそ我身のうらをうらむる このわたしは我が身と心を恨んでいる。いったい、かかる「うら」は、「浦」に「憂」の語幹を掛けると説かれるが、いかが。ことこの一首に関しては、「男」の、「浦」と「恨むる」とを掛けた「うらむる」との表現を翻して、掛詞を用いずに、あえて直線的に叙べたとは見られまいか。「女」は自身の「うら」すなわち心「男」の浅さを見抜けなかった自らの拙い心を憎み、恨むのである。

（二）女、大和へ

女、今は我をばよも訪^とはじ、と思ひて、大和へ下^{くだ}る
とて、男のもとへやりける。

3. 三輪の山いかに待ちみむ年^{とし}経^ふとも訪^{たう}ぬる人もあらじと
思へば

男の返し、

4. もろこしの吉野の山にこもるとも思はむ人に我^{われ}おくれ
めや

男のもとより、

5. 世をうみの沫^{あは}と消えぬる身にしあればうらむることぞ
数^{かず}なかりける

奈良坂に追ひておこせたりける。

6. わたつみと頼めしことのあせぬれば我ぞわが身のうら
を恨^{うら}むる

（三）龍門詣でから憂き世へ

大和に三月はかり有けるにさうし、て寺めぐりせむとてりう門といふ寺にまうてたりける正月十一日はかりなむ有ける此寺
のありさまは瀧は雲のなかよりをつるやうになむ有ける仙人の岩屋といふ所はいとあはれにとしつもりていはのうへに苔や
へにむしたりみるにあはれにたうとくもの、みおほえてなみたはおつるたきにもおとらすなかむるほどにさかもとにてゆき
かきくらしふる程にいさ哥よまむといふにこの女

たちぬはぬきぬきし人もなき物をなに山めの布さすらはむ

とよみたりけはこと人よますなりにけり今日はみちにいて、こしと所にやとりぬ

女は、今となつては私をまさか訪ねて来ることもあるまいと
思つて、大和へ退こうと考えて、男のもとへ贈つた歌、

3. 三輪の山よ、このわたしにどうして待つてみるかなどできましよう。
何年たつても、訪ねてくれる人などあるまいと思いますのに。

男の返歌、

4. 唐土の吉野山にお籠りになつたとしても、私を恋慕してくれるあな
たに、私は決して後れなどしないよ。

男のところから、

5. この世を倦^うみ（いやになり）、海の沫となつて正体もなく消えてしま
うような、つらくはかない身となつてしまった私だから、浦ならずと
も、恨めしく思うことは計り知れなかつたよ。

奈良坂まで追つて贈つてきたのであつた。（女の返歌は、）

6. 海のように深い愛情だと頼みに思わせたあなたのお言葉が浅いものと
なつてしまいましたので、わたしこそ自分の心^{こころ}を恨めしく思つており
ます。

みもはてすここにきえなてかきりなくいとふうき世に身のかへりくる

とひとりこちて袖しほるはかりなきぬらしたりけり

○大和に三月はかり有けるに 大和で三月ほど暮らした頃に。後に「正月十一日ばかり」との日付が見えるので、「女」の大和入りは十月であったことが知られる。○さうして寺めぐりせむとて 身を清め、寺々をめぐろうと思いつて。「さうし」は、「しやうし」「さうしん」とも。「精進」である。「女」は、思いつた寺めぐりに先だって、心身を清めようというのである。「女」は、大和に身を置いて三か月、どうやら、なおも過去を清算できぬものである。寺院詣では、事態打開に向けて「女」がみずから案じた、窮余の一策であったと言うべきか。○りう門といふ寺にまうてたりける 龍門という寺に詣でた、それは。龍門寺は、奈良県吉野郡吉野町に存在した寺。龍門山（竜門岳）の南斜面山腹にある龍門の滝の上に位置し、金堂、三重塔、六角堂、僧房などの伽藍が立ち並んでいた。龍門山は古代には神仙境であった。また、延喜元（九〇二）年頃に生存し、自らも仙人と称された天台の陽勝によれば、龍門寺には大伴仙・安曇仙・久米仙の三人の仙人がいたと伝えている（『扶桑略記』延喜元年八月二十五日条）。○正月十一日はかりなむ有ける 正月十一日頃のことであった。「ばかり」の後に「に」を補いたい。あるいは、「り」（字母「里」）の終筆部と「に」（字母「尔」）との連なりのなかで「に」が落ちたか。ところで、本記が、かく時間意識を持ち合わせる表現体であることを押さえておきたい。○此寺のありさまは瀧は雲のなかよりをつるやうになむ有ける 龍門寺の様子は、あたかも瀧が雲の中から落ち来たるようであった。『全注釈』は、「現況」が「瀑布とか激流とか圧倒的に迫って来るような感じの滝ではない」ことを指摘し、「仙境」という所は。一類本は「山の人の家といふは」、三類本は「仙のいはやといふは」に作る。また、たとえば『扶桑略記』治安三（一〇二三）年十月十九日条に「仙洞雲探」、『顕注密勘』に「仙窟の洞」といった表現が見える。○いとあはれにとしつもりていはのうへに苔やへにむしたり たいそう趣深く年月が重なって、岩の上には苔が幾重にも生えている。前項に引いた『扶桑略記』同条には「青苔巖尖」とある。○みるにあはれにたうとくものゝみおほえてなみたはおつるたきにもおとらず それらの光景が、見ているとしみじみと胸に迫り、尊く感じられるにつけ、身の上のつたなさばかりが思われ、涙は落下している滝にも劣らぬほどにとめどなくあふれ。「もの」は、「女」の、変えようのない宿運。「女」は、時を経て独特の情趣や興趣、あるいは哀感を疊積させてきた龍門寺の景勝に向き合う我が身の、どうにもならぬ卑小さ、つたなさを、否応なしに痛感させられているのである。ちなみに前引の『扶桑略記』は、龍門寺の景に相對した宇多上皇の情動に係って、「不覺落涙」「痛感飛泉」との表現を用いていた。なお、「おとらず」のあとは読点と読むが、むしろ句点と見ることもできる。○なかむるほとに ほんやりと見やっていると。「女」は、しばし立ちつくすほかないのである。○さかもとにてゆきかきくらしふる程に 坂のふもとで、雪

が空一面を暗くして降ってきたので。天候が急変したのである。○いさ哥よまむといふにこの女 随伴していた人が、「さあ、歌を詠みましょう」と呼びかけると、まず例の女が。折しもの降雪に、随伴の者には確かに作詠への興趣をそそられたのである。○たちぬはぬきぬきし人もなき物を 裁断したり縫製したりしない衣を着ていた人など、もういないのに。「たちぬはぬきぬきし人」は、いわゆる無縫の天衣を着た人、すなわち仙人のこと。「なき物」は、飛来し飛去した仙人伝説を直截に承けての物言い。○なに山めの布さすらはむ どうして山の女神が布をゆらめかすのだろうか。「山め」は、「山女」が仮名書きされたか。「山女」は「山姫」に同じだが、ここではこのままでヤマヒメと訓みたい。すなわち、山を領じ司る女神である。たとえば山の木々の紅変もその仕業との発想から、「山姫の染めてはさほす衣か」と見るまでにほふいはつつじかな（好忠集・七九）などと詠まれた。ここでは、滝（＝瀑布）が雪の降るなかを落流するさまが、山姫が雪という「水」のなかで布を「さすらふ」すなわちゆらゆらと漂わせる所業と見立てられたのである。なお、「さすらはむ」は、諸本「さすらむ」に作るところであり、二類本中でも底本の独自異文である。○とよみたりければこと人よますなりにけり と詠んだところ、他の人びとは詠まなくなってしまうたのだった。見立ての技法を用いての一首に、実は深く込められている「女」の心情を知る随伴の人びとには、もはや表層的な雪景詠など詠むに堪えなかったのである。○今日はみちにいて、 日が改まってこの日は街道に出て。山中から吉野川沿いの街道に出たのであらう。○こしと所にやとりぬ 越という所に宿泊した。「こし」は、一類本に「こしへ」とあるのに従い、越部を比定すべきか。「越部」ならば、現在の奈良県吉野郡大淀町越部。ただし、三類本も同じく「こし」であり、あるいはその土地での呼び習わしの反映とも見られるか。それにしても、「こしと所」は意を成さない。あるいは、「い」（字母「以」と「ふ」字母「不」ないし「婦」の二字が「所」一字へと誤写されたか、もしくは単純に「いふ」が誤脱したか。しばらくは一類本のかたちに従い、「と」と「所」との間に「いふ」を補っておきたい。○みもはてす 龍門での寺や滝の景観も雪景も見尽くすことはなく、さりとて身の果てることもなくて。「み」は、「見」と「身」とを掛ける。見尽くし得なかったのは、龍門詣において感動を伴って目に触れたすべての光景であらう。○そこにきえなて あるいはまた、そこで消えることもなくて。たとえば、『扶桑略記』延喜元（九〇一）年八月廿五日条に、「天台山沙門陽勝、於大和国吉野郡堂原寺辺、飛行空中。（…）不食无飢、無衣如暖。如此送年、遂以飛去。吉野山久住禪眾云、『陽勝上人早既成仙。或逢龍門寺辺、忽以遠去。（…）者。（…）』と伝わる仙人の飛去の事蹟をふまえての詠み口なのであらう。○かきりなくいとふうき世に身のかへりくる ひたすら厭う、つらい俗世にこの身が再び帰って来たことだ。「憂き世」は、同時代的に見れば、「憂き世には門させりとも見えなくなどか我が身の出でがてにする」（古今・卷第十八・九六四・平貞文）といい、「惜しからでかなしきものは身なりけりうき世そむかんかたを知らねば」（後撰・卷第十六・一一八九・紀貫之）といい、不遇に発する想念のなかで用いられており、当歌の独自性が知られよう。さて、「かへりくる」は連体形である。諸書・諸注にその指摘を見ないが、一首の力強く重い押し出しの形成に与った連体止めによる歌い納めは、やはり、しかと味わっておきたい。○とひとりこちて袖しほるはかりなきぬらしたりけり と独り詠んで、袖もしほるほどに涙で泣き濡らしたのであった。「ひ

とりこつ」は、つぶやく、の意。ここでは、独りつぶやくように一首を詠出したことをいう。「袖しぼる」は、落涙の多さをいうときの常套表現。

(三)龍門詣でから憂き世へ

- 大和に三月ばかりありけるに、精進して寺めぐりせむとて、龍門といふ寺にまうでたりける、
正月十一日ばかりになむありける。この寺のありさまは、瀧は雲の中より落つるやうになむありける。仙人の岩屋といふ所は、いとあはれに年積もりて、岩の上に苔八重にむしたり。見るに、あはれに尊く、物のみおぼえて、涙は落つる瀧にも劣らず、ながむるほどに、坂本にて、雪かきくらし降るほどに、「いざ歌詠まむ」と言ふに、この女、裁ち縫はぬ衣着し人もなきものをなに山女の布さすらはむ

と詠みたりければ、異人詠まずなりにけり。

今日は道に出でて、越といふ所に宿りぬ。

8. みも果てずそこに消えなで限りなく厭ふ憂き世に身の
帰り来る

と独りごちて、袖しぼるばかり泣き濡らしたりけり。

- 大和で三か月ほど過ごしたところに、精進潔斎して寺院めぐりをしようと思って、龍門という寺に参詣した、それは一月十一日ごろであった。この寺のありさまは、瀧が雲の中から落ちてくるようであった。仙人の岩屋という所は、たいそう趣深く年月が経つて、岩の上には苔が幾重にも生じている。見るにつけしみじみと尊く、おのずと我がつたない宿運ばかりが思われて、涙は落ちる瀧にも劣らずあふれ、ぼうつと立ちつくしているうちに、坂の下で、雪が辺りを暗くするばかりに降るので、(同行の人びとが)さあ歌を詠もうという、この女は、
7. 裁ちも縫いもしない衣を着た人などいないのに、なぜ山姫は布を揺らめかしているのでしょうか。

と詠んだので、他の人びとはそれ以上は詠まずじまいになったのだった。

この日は街道に出て、越という所に泊まった。(そこで女は、)

8. 龍門寺でのさまざまな景を見尽くすことも、身の果てることもなく、あるいはまた、かつて虚空へと飛去した仙人のようにそこで消えることもなく、ひたすらに厭わしく思う憂き世にこの身が帰ってきました。と独り詠じて、袖を絞るほどに涙で泣き濡らしたのだった。

(四)御息所の招き

かゝるほとにかの御息所の御もとよりはやのぼらせよとめしたりければはやのほりたまひねみやつかへをこそせよとおもひしかとおもはせていふになむしぬる心ちしけるさてのほるみちにてふしみといふ所にて名にたて、ふしみのさと、いふことはもみちをとことしけるなりけり

○かゝるほとに そうこうしていると。「女」がいよいよ新たな一歩を踏み出そうとしていた折しも、といったニュアンスを酌むべきか。○かの御息所の御もとより あの御息所の御もとから。「女」の許に「御息所」から消息が届くのである。「かの」は、文脈上に「御息所」が再び導き入れられてくることを印象づける言表である。○はやのぼらせよとめしたりければ 「早く参上なさい」と呼び寄せなさったので。御息所からの消息は、再出仕の下令なのであった。「女」が「再生」せんとする時機と符節を合わせるかのような御息所の意向の発動は、その主従の比類無さを物語るものであると把握すべきか。○はやのほりたまひね 早く参上なさいな。次の「みやつかへをこそせよとおもひしか」まで、親の言葉である。○みやつかへをこそせよとおもひしか 宮仕えをこそなさい、と思っていたのだよ。掉尾の「か」は、詠嘆の終助詞。親は、宮仕えへの専心こそが娘へのそもそもの願いであり望みであったというのである。はるか始発部に、「おやいとかなしうしてをとこなともあはせさりけるを」とあったのが想い合わされよう。○とおもはせていふになむ と論して言う。と含みを持たせて言うにつけ。「男」(仲平)との一件を暗に論しつつ、宮仕えをこそしてほしいのだから再出仕をためらうことはないとの含みを、親は滲ませるのである。「女」の背をそれとなく押す親心である。○しぬる心ちしける 死ぬほどの気持ちがあった。いかにもの親心に触れるにつけ、親の思いに沿い得なかったおのが身と心とを省み、「女」は激しい慚愧の思いに苛まれるのである。先にも、「女はつかしと思はとに」とあった。○さてのほるみちにて さて、上京する道の途中で。「さて」は、そうした経緯^{いきさつ}があつて。御息所の意向、親の思いを承けて、ということである。○ふしみといふ所にて 伏見という場所。この「ふしみ」は、大和国生駒郡伏見、現在の奈良市菅原町西大寺南方の地。歌枕の一つである。○名にたて、その名を喧伝して。この「たつ」は下二段活用で、他動詞。「名に立つ」は、噂にする、世に知らせる、の意。○ふしみのさと、いふことは この地を「伏見の里」と言うのは。諸注「臥し身」を掛けるとするが、『全注釈』の説くとおり、確かにそれでは字義どおりであつて、そもそも掛けられてはいない。さりとて、『全注釈』の、「臥し身」を掛ける、との解にもまた難がある。トに表現されていると見られ、ただし実はそこに、その名は「伏し見」なのにその名を立てて、という言葉遊びの機知が秘かに発動していたのだという一点に気づくべきであつたらう。○もみちをとことしけるなりけり 紅葉を床として敷いたのであつたからだ。「伏見」の名の由来を、紅葉を寢床にしてそれを見

て賞美できるからだ、〔女〕は得心したのである。なお、ここにも「をとこ（男）」としける」が隠されているとの言葉遊びを指摘できようか、あるいは指摘すべきか。

（四）御息所の招き

かかるほどに、かの御息所の御もとより、「は
や上らせよ」と召したりければ、「はや上りたま
ひね、宮仕へをこそせよと思ひしか」と思はせて
言ふになむ、死ぬる心地しける。さて、上る道に
て、伏見といふ所にて、

9. 名に立てて伏見の里といふことは紅葉を床と敷けるな
りけり

こうしているうちに、あの御息所のもとから、「早く参上せよ」とお呼びがあったので、（親が）「早く参上なさいな、（かねて）宮仕へをこそしなさいと思つていたのだよ」と含みを持たせて言うにつけ、（女は）（慚愧に堪えず）死ぬほどの思いがした。さて、参上する道中、伏見という所で、

9. 名に含まれるのは「伏し」なのに、それを取り立てて世の人が「伏見の里」というのは、ここが、こんなわたしにも、紅葉を臥し処として敷いて、その麗しさをこうして独り抱きとめて見つめ賞美することができた、そういう場所だからなのでした。

（五）男たちの挑み、女の拒み

つかうまつるにこのをとこは文をこせあはむなといへとあはてありわたるに此をとこのあに、あたるをとこありけりたのみ
たまふかあなおさなわれをおもへなとせちにいふ、みなとはかよはせとさらにあはさりければかくいふをもとの人しりたり
けり女のさにて前裁のおかしかりければてすさひにをはなをむすひたりけるをはしめの人きてみて

花すゝきわれこそしたにたのみしかほにいて、人にむすはれにけり

とてもものをきゝたるはやといひければ人かすならさらむにはなとかはとてこそなとうちとけたるけしきにていへはをとこも

いとあはれとおもふされとあはてやりつあにのをとこなとかまいりたまはぬ人の心をいあておぼすやとて
ひたふるにおもひなわひそふるさるゝ人のこゝろはそれぞよのつね

返し

よのつねの人の心をまたみねはなにかこのたひけぬへきものを

このをとこ御心のつられはよしのへなむまかるとて

ひたふるにいとひはてぬるものならはよしの、山にゆくゑしられし

返し

同

わかやと、たのむよしのに君かこはおなしかさしをさしこそはせめ

○つかうまつるに ふたたびお仕えするにあたり。一類本の「つかうまつりあるくに」は、明らかに、再出仕が開始した体だが、こちらは、次の「この男」が行動に出ることになる前提として得たであろう、「女」が再出仕することに係る、いうなれば情報源を形成する文脈と見ておく。○このをとこは文をこせ当の男は手紙をよこし。「このをとこ」は、これまでの文脈を継起させてきた、冒頭にも「此おとこ」とあった、仲平に比定される「男」のことである。その男が、「女」の再出仕に係る情報を得て、手紙をもつて再びの接近をこころみてきたのである。○あはむなといへと「逢おう」と言うけれども。男女間での「逢ふ」は、言うまでもなく、契りを交わす意。「男」は、「女」に、以前の関係の再燃・復活を求めてきたのである。○あはてありわたるに 逢わずにいつづけたところ。「わたる」は、時間の継続を表わす。前にも、「としこらいひわたりたまひけれ」との表現があった。○此をとこのあに、あたるをとこありけりこの男の兄にあたる男がいた、その男が。仲平の同母兄で、基経の長子たる、藤原時平（八七一―九〇九）に比定される。なお、訳に示したとおり、ここは「けり」のあとを読点で処理し、その男が、と立ち上げる呼吸と見たい。○たのみたまふか いまだにあの男をあてになさるのか。「たのむ」は、男女の文脈にあつては、愛情関係の相手として信頼する、の意。「兄にあたる男」は、「女」が依然として「男」に執心しているとの推断のうえにたつて、その再考ないし翻意を迫ろうとするのである。○あなおさな なんと幼いことか。「男」に執心する「女」の思慮を、未熟だと、「兄にあたる男」は指弾するのである。○われをおもへ 私を愛しなさい。「兄にあたる男」は強引に求愛するのである。なお、「たのみたまふか」からここまでは、「兄にあたる男」の発信した手紙の言葉ということになる。○なとせちにいふ などと、しきりに恋心をしたためた手紙をよこす。「せちに」は形容動詞「せちなり」の連用形。ひたすらであるさま、心に深く感じるさま、などを表す。ここは、懸命に、しきりに、のニュアンス。「いふ」は、男女間では、求婚する、恋心を示す、の意。○みなとはかよはせと 手紙などは通わしたけれど。「など」はいわゆる婉曲。「かよはせ」たのは「ふみ」以外にないはずだが、はっきり言うのを避けてやわらかく表現した。○さらにあはさりければ 決して逢うことはしないでいたところ。「さらに」は、一つのことが繰り返されたり、あることの上に別のことが加わるのが原義だが、下に打消の語や否定的表現が待つ場合には、決して（…ない）、まったく（…ない）、の意を形成する。○かくいふを こんなやりとりをしているのを。○もとの人しりたりけり もとの男が知ったのであった。「もとの人」は、仲平に比定される「この男」のことである。のちには「はじめの人」とも言い表される。「男」

は、「兄」と「女」との、まだ文通段階ながら、交渉に気づいたのである。○女の 女が。「女」との言表は、男女の文脈においては、「男」と明確に対応する物語的な記述である。その「男」が、明らかに二人になったことを承け、書き手（語り手）が改めて据え直した恰好である。○さにて 実家で。「さと」は、前出の五条の里邸であろう。再出仕に向けて戻っていたのである。○前裁のおかしかりければ 前裁が風情あったので。「前裁」は庭の植え込み。○てすさひにをはなをむすひたりけるを 手慰みに、尾花を結んであったのを。「てすさび」は、手先でする何気ない動作。しばしば、無意識裡に為された所作を示すものとして言い表される。「をばな」は、尾花。秋に黄褐色の花穂を出す、イネ科の多年草ススキである。「女」は、二人の男からの求愛を受けてなお、というよりも受けてしまったからこそその満たされぬ思いを抱え、その穂の出た薄を無意識のうちに結んでしまうという行為に至ったのであろう。○はじめの人きてみて はじめの男が来て、見て。「はじめの人」は、先の「もとの人」に同じ。「女」と愛情を交わした最初の人であることを承けての言い方。「男」は愛情の復活を求めて「女」の実家を訪ねた折しも、庭に、穂の結ばれている尾花を見出したというのである。あるいは、そこに「兄」と「女」とが相並び穂を結び合う姿を想い描いたか、ともあれその薄の形姿を、「女」が他の男と契りを結んだ意にとりなして歌を詠みかけるのである。○花すゝき 花薄よ。「花すすき」は、尾花に同じ。「女」に見立て、それに向け、呼びかける体で詠み出だすのである。○われこそしたにたのみしか この私こそが妻にしようと深く頼りにしていたのに。「した」は、内心。心の中。「こそ…しか」の係り結びは、ここでは逆接の文脈を形成して下句に続く。○ほにいて、 穂が出て、はつきりと。「ほにいづ」は掛詞的な表現として、「穂に出づ」と「秀に出づ」の両意を効かせる。「秋の野の草の袂か花薄ほに出て招く袖と見ゆらむ」（古今・巻第四・秋歌上・二四三・在原棟梁）など。○人にむすはれにけり 他の男と結ばれてしまったことよ。「女」が「兄」と既に結ばれたと推断して恨むのである。「むすぶ」は「花すすき」の縁語で、人と結ぶ、すなわち契る意を働かせる。○とて と歌を詠んでよこして。○ものをきゝたるはやといひければ あなた方のことを聞きましたよと言ったので。「もの」は、ここでは、動かしがたい成りゆき、決定的な噂、といったニュアンス。「はや」は、終助詞（「は」終助詞、「や」問投助詞、とも）。活用語の連体形に付いて、強い感動・詠嘆を表す。…（こと）よなあ。（ああ）…よ。○人かすならさむにはなとかはとてこそ 人並みでないわたしに、どうしてそんなことがありましようか、と申し上げて、それ以上は…。「人かす」は、人数。一人前の人間として数えられること。「ならさむ」は、断定「なり」の未然形＋打消「ず」の未然形＋婉曲「む」の連体形。「む」のあとには「我」ないし「我が身」などを補い得る。「なかは」は、ここでは反語。どうして…か（いや、…ない）。「女」は、自分のような取るに足りない女が「兄」ほどの方と関係することなどない、と言い切るのである。「こそ」のあとには、「止まめ」などを補い得ようか。○なとうちとけたるけしきにていへは などと、うちとけた様子で言うので。「うちとく」は、男女の文脈では、心を許して親和する、遠慮や気兼ねをしない、といった意を表す。「女」には既に「男」を拒絶する姿勢が定まっており、ここではそれに由来するある種のゆとりが、相手の「男」には、お兄様とは無理でもあなたとなら…と言ってくれているものと錯覚される、そういう気脈を生んでいるのである。○をどこもいとあはれとおもふ

ほかならぬ男は、たいそう愛しいと思う。「女」の本意を金輪際つかめぬ「男」の、「女」の見かけの「うちとけたるけしき」を見損ねての情動である。○されとあはてやりつ けれども逢わないでおいだ。「やる」は、うちすててそのままにする、事態を流れのままにする、事を成りゆきにまかせて進める、の意。「女」は拒絶の本意のままに従うのである。○あにのをとこ 兄にあたる男が。先に「此をとこのあに、あたるをとこ」とあつた、時平に比定される男である。○なとかまいりたまはぬ どうして参上なさらないのか。京に戻りながらすぐに再出仕せず、里居状態にある「女」に、「兄の男」は催促の言葉を投げかける。求愛への利便を慮る「兄」の下心の現れ、というべきであろう。○人の心を あの男の心というものを。仲平に比定される、「女」の心を踏みについた「男」の心を、「兄」は問題視する体である。○いゝておほすやとて 実家に籠もって思い悩んでいらつしやるのか、と言つて。「いゝて」は、一・三類本ともに「いゝてゐて」に作るが、宮中を退出して実家にいることをそう表現するかどうか、あるいはいつたい「出である」が通常そのような意を形成し得るのかどうか。いま仮に、原姿「いゝてゐて」とあつたものが、連綿体をもつて書写される過程で「り」が落ちたものと見ておきたい。「入りある」は、たとえば「家に入りあるたらむ人をば、知らずもおはせかし」(『枕草子』第二六段「杜は」)など。引きこもる、の意である。○ひたふるに むやみに。形容動詞「ひたふるなり」は、しやにむにあたりかまわず振る舞うのが原義。一方的で強引なさま、むやみなさま。○おもひなわひそ 思い悩みなざるな。「おもひわぶ」に、禁止をあらわす「なゝそ」が組み込まれた表現。「思ひわぶ」は、思ひ悩む、思ひ悲しむ、の意。「ふるさ」と思ひなわびそ桜花ほかの色にもおとらざりけり」(京極御息所歌合・一四)。○ふるさる、 飽きて見捨てられる。忘れられる。「ふるす」は、「古す」。しばしば男女の文脈において、飽きて見捨て、忘れる、の意。「女」が「男」に捨てられた過去を「兄」は下に敷いたのである。○人のこゝろは 男の心というもの。「人」は、『全注釈』が説くとおり不定称だが、ここでは当然に、「兄」から見た「弟」の心が指し示されている。○それそよのつね それがふつうなのだ。「世の常」は、世間並み、ふつう、の意。「世の常のねをし泣かねば逢ふことのなみだの色もことにぞありける」(後撰・卷第十・恋二六六九・藤原治方)など。○返し 返歌。「女」からの返歌である。○よのつねの人の心を 世間に当たり前のものとして存するという男の心を。「女」は、贈歌のことばを直ちに巧みに用いて切り返すのである。○またみねは まだ経験したことがないので。「みる」は、経験する、体験を経て分かる、の意。仲平に比定される「男」以外の男を悉皆知らぬ以上、「男」の心が「世の常」のものとどうか比較・判断できぬというのが「女」の論理なのである。○なにか いやはや。さて、どうしたものか。ここでの「なにか」は、感動詞の用法である。○このたび 今回のこと。「世の常」に對置する表現である。ただ一回のこのたびの出来事を経験しただけで、といったニュアンスである。○けぬへきものを 死んでしまひそうなのに。「け」は、ヤ行下二段活用動詞「消ゆ」の連用形「消え」(k i e)の音のつづまつたもの(一説には、カ行下二段活用動詞「く消」の連用形)。「ものを」は、逆接の気持ちを含んだ詠嘆の終助詞。この「消ぬべきものを」を結句に用いた同時代詠は意外にも少なく、『古今和歌集』の2首、すなわち「唐衣たつ日は聞かじ朝露のおきてし行けば消ぬべきものを」(巻第八・離別歌・三七五／よみ人しらず)と、「逢はぬ夜の降る白雪と積もりなば我

さへともに消ぬべきものを」(巻第十三・恋歌三・六二二／よみ人しらず)とを認めるのみである。○このをとこ この男は。時平に比定される男である。○御心のつらければ あなたのお心が冷たいと感じられてならないので。「つらし」は、相手の仕打ちや自分の置かれた状況に耐えながら、非情だ、冷たいと感じるさまを言う語。○よしのへなむまかる 吉野へ行きます。「吉野」は、大和国南部の郡名。今の奈良県吉野郡とほぼ一致する地域。古来、修験道の根拠地と位置づけられ、また、俗世を逃れるべき隠棲・隠遁の地というイメージもある。「この男」は、そこに籠もってしまう方がいいんだね、と、それを「女」へのいわば脅しとして持ち出したのである。「まかる」は、「行く」の丁寧語である。○つて と言って。ここまですが歌の前書きであることを表す符牒である。○ひたふるにいとひはてぬるものならば あなたが一方的に私のことを嫌いきってしまったというのならば。「ひたふるに」は、前々歌に既出。一類本は「ひらすらに」に作る。「いとふ」は、嫌う、嫌がる、の意。「はつ」は、補助動詞として上の動詞の連用形について、…し終わる、すっかり…する、完全に…になる、の意を表す。なお、『全注釈』は、「この世を捨て切ることができるものならば」と解している。○よしのゝ山にゆくゑしられし 吉野の山で行方を知られないようにしたい。「しられし」は「知られじ」で、「じ」は打消意志である。「この男」は、吉野山に隠遁してしまうぞ、それでも構わぬか、と「女」に迫るのである。○返し 返歌。ふたたび「女」からの返歌である。○わかやとゝたのむよしのに わたしの住み家と頼りにしている吉野の山に。「女」は、吉野が父のかつての任地大和国に属すこともあり、「この男」が籠もらんと言いつけるその地を、わたしこそがそもそも頼みとしているのだと、ある種のあてこすりをこめて切り返すのである。○君かこは あなたが来るのならば。あなたに本当にその気があるのならば、と、「この男」に対して念押しを迫る体である。○おなしかさしを あなたと同じ挿頭かざしを。「女」は、「おなじ」の語によって、「この男」への同調を装うのである。「かざし」は、草木の花や枝、造花などを髪や冠に挿すこと、また、そのもの。神聖なる信仰の地でもあった吉野への入山に際し、敬虔に心身を清めんとする内意を示す儀礼としての挿頭であろう。○さしこそはせめ 挿すことにしましょう。「こそ…め」という係り結びによって、結果的に、「女」の「この男」へのあてこすりはその強度を増すことになる。「め」は、むしろ、意志を表す「む」の已然形。贈歌の「じ」に応ずる恰好である。

(五)男たちの挑み、女の拒み

仕つかうまつるに、この男は文ふみおこせ、「逢あはむ」など言へど、逢はでありわたるに、この男の兄にあたる男ありけり、「頼たのみたまふか。あな幼をさな。我を思へ」など、せちに言ふ。文などは通はせど、

(女が御息所に) お仕えするにあたり、例の男は手紙をよこし、「逢おう」などと言うけれども、会わずにいつづけていると、その男の兄にあたる男がいた(のだが、その男が、女に)「(まだ弟のことを)あてになさるのか。何と幼い。この私を愛しなさい」などと、しきりに恋心を示す。手紙などは交わすが、決して逢わ

さらに逢はざりければ、かく言ふを、もとの人
知りたりけり。女の、里にて、前裁せんざいのをかしかり
ければ、手すさびに尾花を結びたりけるを、初め
の人、来て見て、

10. 花すすき我こそ下に頼みしか穂ほに出でて人に結ばれに
けり

とて、「物を聞きたるはや」と言ひければ、「人数ひとかず
ならざらむには、などかはとてこそ」など、うち
とけたるけしきにて言へば、男もいとあはれと思
ふ。されど、逢はでやりつ。兄の男、「などか参
りたまはぬ。人の心を入りゐておぼすや」とて、
11. ひたぶるに思ひなわびそ古ふるるさる人の心はそれぞ世
の常

返し、
12. 世の常の人の心をまだ見ねばなにかこのたび消ぬべき
ものを

この男、「御心のつらければ、吉野へなむ罷まかる」
とて、

13. ひたぶるに厭いとひ果てぬるものならば吉野の山に行くへ
知られじ

返し、

14. 我が宿と頼む吉野に君が来こば同じかざしを挿さしこそは

ずにいたところ、こんなふうに（兄が女に）言い寄っているのを、
最初の男「弟」が、知った。女が、実家で庭の草木がみごとだっ
たので、手なぐさみに尾花を結んであったのを、その最初の男が
来て、見て、

10. あなたは、この私こそが妻にしようと心から頼みにしていたのに、あ
きらかに他の男と結ばれてしまった――。

と詠んで、「あんまりの噂を聞いたよ」と言ったところ、女が「人
並みではない身には、そんな話、あるはずないでしょ、とだけ申
し上げておきますわ…」などと、いかにもうちとけた様子で言う
ので、男も女をとてほしいと思う。けれども、女は逢わない
ままにやり過ごした。兄にあたる男は、「どうして御息所のもと
に参上なさらないのか。男の心なるものを家に引きこもってお悩
みか」と言って、

11. そうむやみに悩み悲しみなさるな。女が簡単に棄てられるのをよしと
する男の心、それが世間ではふつうなのだよ。

女の返歌、

12. それがふつうだという男の心など、わたしにはまだ分かりませんので、
さて、どうしたものでしょうか、このたびのただ一回のことで、死ん
でしまいそうですのに。

この男は、「あなたのお心がつれないので、吉野へ行きます」と言っ
て、

13. あなたが私をひたすら嫌いとおせるというのなら、私は吉野の山に行っ
て、行方知れずになろう。それでもいいんだね――。

と詠んだ。女の返歌、

14. わたしの住処と頼みにしている吉野にあなたが来るといふのなら、わ
たしもあなたが挿すのと同じ花を挿頭かぶしとして挿すことにしましょう。

せめ

その必要はないとは存じますが……。

(六) 御息所の病臥と女のさらなる拒み

かくてみやす所なやませたまひければあつまりさふらふきのくら人といふしてこのはしめのをとこあからさまにしもにをりよものいはむといはせたりければ返事に心をしはしなくさめてといふふることのはしをなむいひたりけるおとこ

後十二批紀左大臣

よひのまにはやなくさめよいそのかみふりにしともうちはらふへく

返し

同

わたつみとあれにしとこを今さらにはらはむ袖やあはときえなむ

といひたりければ人くよひのめさましてなむあはれかりける

○かくて さて。それから。この「かくて」は、前段のしかるべき文脈や語脈を指示しているわけではあるまいと判断されるからは、接続詞と見るべきであろう。○みやす所なやませたまひければ 御息所がお患いになったので。「なやむ」は、病気になる意。○あつまりさふらふ 女房たちが集まりお側そばに控える。御息所の病状を案じた女房たちが当然のように集い、控え、看守るのである。○きのくら人といふして 紀藏人という女房に言づけて。「きのくら人」は未詳。女藏人か。いま仮に「紀藏人」と解しておく。「といふ」の後に、「一類本は「人」、三類本は「もの」を、それぞれ措く。「して」は格助詞で、ここでは使役の対象を表す。…に口で指示して。○このはしめのをとこ 例の、はじめの男が。「この」は、よく話題にのぼる物・人・事をさして言う語。例の。あの。「はじめのをとこ」は、仲平に比定される男である。○あからさまにしもにをりよ ほんのわずかの間でも私室に退出せよ。「あからさまに」は、形容動詞「あからさまなり」の連用形。「あから」は「あかる（別る）」の古形で、「さま」は漠然と方向を示す。よって、本来の居所からちよつと離れて別の方向へ、というのが本義だが、こゝはまさにその典型的な例。多くは「あからさまに」ときに語幹「あからさま」の形で、ちよつとかりに、一時的に、の意。「しも」は、「うへ」の対で、女官や侍女の詰め所、また、局を言う語。ここでは、「女」の私室になる曹司。「をりよ」は、歴史的仮名遣いによれば「おりよ」。上二段活用「おる」の命令形。「おる」は、貴人の前から退く、退出する、の意。「はじめの男」は、病床の御息所の傍らにいる「女」に、一時的でもかまわぬとの条件付きとはいえ、そこからの辞去を要求しているのである。○ものいはむ 話がしたい。「ものいふ」は、ここでは状況的に「情を通わせる」とまではさすがにいかなからうが、特定の二者間のことゆえ、しかるべきことを口にする、それ相応のことを言う、といったニュアンスにはなろう。○といはせたりければ と言わせたところ。

「はじめのを」とこ」が「きのくら人」を通じて「女」に言伝てさせたのである。○返事に 返事として。「女」は、ともあれ、返答には応じてゆくのである。○心をしはしなくさめて わたしの心を先ずはしばらくのあいだ慰めて……。片桐『伊勢』が指摘した、「憂しと思ふ心をしばし慰めむ後に世人をあはれと思はむ」（堀河宰相具世筆本『拾遺集』卷八所伝・よみ人しらず）という一首の一部を引いた、と見てよい。○といふふることのはしをなむひたりける という古歌の一部を言づけたのであった。「ふること」は、「古言」。昔の詩や歌。古歌。「はし」は「端」。断片。一部。「きのくら人」を通じて言い分を伝えてきた「はじめのを」とこ」に対して、こんどは逆に、「女」が「きのくら人」を通じて古歌の一部を用いてその趣意をみずからの気持ちとして伝えたのである。前項に引いた「憂しと思ふ……」の一首を、「つらいと思う私の心をしばらく慰めたいと思います、よその人のことを思うのはその後からです」と解し得るとすれば、「女」は「を」とこ」からの要求を、今は応じられないとして、事実上拒否した、ということになるのである。○おとこ 男は。「おとこ」は、歴史的仮名遣いに従えば「を」とこ」。右の、仲平に比定される「はじめのを」とこ」に同じである。○よひのまに 宵のうちに。「よひ」は「宵」。夜に入ってから間もないころ。日没から夜中になる前までのうち、「夕べ」に続く時間帯。その後が、男女の相逢う「夜中」になる。○はやなくさめよ 早く慰めなさい。「なくさめ」る対象は、『全注釈』の説くとおり〈あなた〉＝「女」の「憂しと思ふ心」であって、〈わたし〉＝「おとこ」のことではない。男が構えたのは、宵の間に〈あなた〉の心が調えられれば、夜中には〈わたし〉と逢えるはずである、という論理である。○いそのかみ 石上。ゆらい、現在の奈良県天理市付近を指した地名。そこに布留の地が含まれ、「石上布留」と呼ばれたことから、地名「布留」、同音の「降る」「古る」「振る」などに掛かる枕詞として用いられるようになった。○ふりにしとこもうちはらふへく 時が経って久しく使われないままであった床を祓い清められるように。「とこ」を「うちはらふ」との表現は、古く『万葉集』に「わが背子は 待てど来まさず 天の原 ふりさけ見れば ぬばたまの 夜も更けにけり さ夜更けて あらしの吹けば 立ち待てる わが衣手に 降る雪は 凍りわたりぬ 今さらに 君来まさめや さな葛 後も逢はむと 慰むる 心を持ちて ま袖もち 床うち払ひ うつつには 君には逢はず 夢にだに 逢ふと見えこそ 天の足り夜を」（卷第十三・三二八〇）と詠まれたように、男との仲の持続を願い、男を迎えんと待つ女の祈りの所作であり、また「ま袖もち床うち払ひ君待つと居りし間に月かたぶきぬ」（卷第十一・二六六七）とも詠まれたように、祈ると同時にする共寝のための準備でもあった。やがて「床」には、それが時の経過のなかに措かれるものとして「古りにし」の表現が冠され、「泣く涙ふりにし床の衣手はあらたまれどもかはらざりけり」（兼輔集・一一五）のように歌われ、扱われるものは床の上の「塵」であることが明示化されて、「塵をだに据ゑじとぞ思ふ咲きしより妹とわが寝るとこなつの花」（古今・卷第三・夏歌・一六七・凡河内躬恒）、「わが魂は床の塵ともまじふらむ宵々あらく払はざらなむ」（古今六帖・一・天・塵・八〇一）などと詠まれるようになった。○返し 返歌。「女」からの、である。○わたつみと 大海のように。「わたつみと」の表現じたいは6番歌に既出だが、ここは、あとの「袖」の語との兼ね合いからも、涙の海を言う。○あれにしとこを あなたがわたしから離れた、その悲しみの涙で海と荒れた床を。「あれ」は、「遠のく。離れる」の意の「離れ」

と「荒れ」とを掛ける。「あれにしとこ」は、むろん、贈歌の「ふりにしとこ」に対置させた表現である。なお、床が流す涙で海になるとする発想は、たとえば、「瑠璃の地と人も見つべしわが床は涙の玉と敷きに敷ければ」（和泉式部集・二八七）など。○今さらに 今になつてまた。こうして捨てられた今あらためて。○はらはむ袖や 共寝のために床を払い清めるとしたらその袖は。「む」は婉曲ないし仮定の用法。「女」の拒絶の姿勢を前提にすれば、文脈としては仮定と見るほうがベターか。「や」は間投助詞。意を強め、また語調を整える。○あはときえなむ 泡と消えるであろう。袖が、涙の海によって、泡となって朽ち果てるというのである。涙で袖が濡れるとする類型を大きく超越する発想に留意したい。○といひたりければ と詠んだところ。○人／＼よひのめさましてなむ 居合わせた女房たちは、宵居のうとうとしていた目をすっかり覚まして。折しも病床にある御息所の傍らに居合わせていた「女」の同僚女房たちは、「きのくら人」を間にして交わされた「はじめのをとこ」と「女」と歌の応酬を図らずも耳にするところとなつたのである。そのうえでさらに、返歌としての「女」の一首は、彼女らの目を覚まさせるほどに見事な逆襲だつたというのである。○あはれかりける 嘆賞したのであつた。男たちを拒絶し続けてもなお男たちからの接近の絶えない「女」への同情もあればこそ、女房たちは「女」の返歌の妙に感嘆し、それを含む応対の絶妙に共感し賛嘆したのである。

(六) 御息所の病臥と女のさらなる拒み

かくて、御息所なやませたまひければ、集まりさぶらふ。紀の蔵人といふして、この初めの男、「あからさまに下におりよ、物言はむ」と言はせたりければ、返り事に、「心をしばし慰めて」といふ古言の端をなむ言ひたりける。男、

15. 宵のま間にはや慰めよ石上ふりにし床もうち払ふべく返し、

16. わたつみとあれにし床を今さらに払はむ袖や沫と消えなむ

と言ひたりければ、人びと、宵の目覚ましてなむあはれがりける。

さて、御息所が病氣におなりになつたので、(女房たちは)集まつてお側に控える。紀蔵人という女房に指図して、あの初めの男は、「すぐにあなたの曹司に下がってくれ。言うことがある」と言わせたので、返事として、〈憂しと思ふ心をしばし慰めむ後に世人をあはれと思はむ〉という古歌の一部を言い送つた。男は、

15. 宵のうちに、あなたのその「憂しと思ふ心」とやらを早く紛らわせてください。時が経つて古びてしまつた床の塵を打ち払うことができるように。

(女の) 返歌、

16. あなたがわたしから去つた、そのせいで流した涙で海のように荒れた床の塵を、今さらながら払うならば、わたしの袖は海の泡となつて消えてしまうことでしょう。

と詠んだところ、女房たちは、宵居の眠かつた目を覚まして感じ入つたのだつた。

(七) 志いと深き男のことなど

また人かすともせぬに心さしいとふかき人そひていひけるふみをこせけれと返事もせさりければ

山かつはいへともかひもなかりけり山ひこそらにわかこたへせよ

なを返事もせさりければあかねとけいせよともいひはなてといへりければ

いなをともしひもはなたすうき物は身を心ともせぬ世なりけり

かゝるに時の大臣なかされたまふむこにて兵衛佐よりたちまの介になされてなかされけるをたゝにてはさしもおほえてやみにしをかくとをくなかれゆきたるかあはれなることゝいひたりければ

かけていへは泪の川のみをはやみこゝろつからやまたはなかれむ

○また さて。それから。話題が転換されることになる。○人かすともせぬに 人数にも入れていないのに。「人かず」は、恋の文脈においては、恋愛対象としての男あるいは女と認められること。また、そのようす。○心さしいとふかき人 恋着心のとても強い男が。ここでの「心ざし」は、愛情に発する執着心、といったニュアンスである。「人」に係る具体的情報は不明とするほかない。○そひていひけるふみをこせけれと 重ねて恋心を示した手紙を寄こしたけれど。「そふ」は、ここでは、一通また一通と重ねて手紙を送ること、「いふ」は、求婚するの意である。なお、「心ざしいとふかき人」の後に係助詞「ぞ」を有する一類本では、言うまでもなく、「そひていひける」で係り結びを形成して文は終止する。しかしながら、「ぞ」を持たぬ当二類本においては、「そひていひける」は直後の「ふみ」に掛かっていくと見るほかはない。右のように解した所以である。○返事もせさりければ 返事もしなかったのだ。「女」は、なおも拒絶の姿勢を崩すことはなかったのである。○山かつは 野卑・下賤な私は。「山がつ」は、樵夫や獵師など、山里で生活する身分の低い人。そこから、教養に欠け、洗練されていない田舎者といったニュアンスで、他者を見くだして、また、自分をへりくだって言う語。○いへともかひもなかりけり 求愛などしても何の甲斐もないことであった。「いへども」は、「人（＝男）」が「女」への求愛のために幾度も手紙を出したことをいう。「かひ」は、手紙を出しても「効」が無いことと、「山」の縁語で「峡谷」を意味する「峽」とを掛ける。「あしひきの山のまにまに隠れなむ憂き世の中はあるかひもなし」（古今・卷第十八・雑歌下・九五三／よみ人しらず）など。○山ひこそらにわかこたへせよ 山彦よ、空で私に答えなさい。「女」からの応答が期待できぬゆえに、せめて山彦のように、私の恋情への応答をしてほしい、と訴嘆するのである。むしろ、そう陳べてなお「人」は「女」からの返歌を期待しているのである。ところで、「山びこ」はそのように、相手からの反応の得られぬ虚しい恋の状況下、なおも反応への冀求を訴える場合に詠まれた。「うちわびて呼ばはむ声に山びこのこたへぬ山はあ

らじとぞ思ふ」(古今・卷第十一・五三九／よみ人しらず)、「打わびて呼ばはむ声に山彦の答へぬそらはあらじとぞ思ふ」(後撰・卷第十三・九六九／よみ人しらず)など。○なを返事もせさりければ それでもやはり返事も出さなかったのだ。「女」の拒絶の姿勢は一貫して変わるところがないのである。○あかねとけいせよともいひはなて 不満ではあるが、「御息所様にお願ひ申してみよ」とでも言ってくれ。意を読み取りにくい文字列である。いま仮に、上記のように、当の文字列全体を、懇請の意を込めた「人」からの呼びかけの言葉と見、「けいせよ」を、事態の打開に向けて「人」がいわば窮余の策として「女」に投げかけてみた、自らが考え得る唯一の方法としての「御息所」の仲介の可能性を押し開くための言葉、と捉えてみた。「いひはなつ」は、きっぱり言う、遠慮なく言うの意。○といへりければ と言いつつたところ。「人」は懇願の限りを尽くしたのである。○いなせとも 否とも諾とも。底本は「いなを」だが、「を」(字母「遠」)は「せ」(字母「世」)の誤写であろう。「いな」は「否」で拒否、「せ」は「諾」で応諾を言う。○いひもはなたす きっぱりと言いつけることもできず。「いひはなつ」は既出。○うき物は つらく感じられるのは。これを詠み込んだ伊勢自身の他詠に、「声たてて泣けど泣かれずうきものは身のまだ消えぬほどにざりける」(伊勢集・二九六)。○身を心ともせぬ世なりけり 自分の身を自分の心のままにできない身の上だったのだ。「世」は、ここでは「女」の身の上、境遇、を言う。○かゝるに こうしているうちに。また話題が転換されてゆくことになる。○時の大臣なかつたまふ その時の大臣が流されてしまわれた。「ながす」は、流罪にする、の意。「時の大臣」については、通例、昌泰四(九〇一)年正月二十五日に配流された右大臣菅原道真を比定する。○むこにて 婿で。道真の女婿が想定される文脈である。○兵衛佐よりたちまの介になされてなかつたを 兵衛の佐から但馬の介に降格されて流された男に對して。夙に伴信友『表章伊勢日記附證』が、そうした左降を辿った人物として「源敏相」を比定したが、その際、同書が『政事要略』卷二十二は昌泰四年正月二十七日条に見出し得るとした記述「但馬權守源敏相左兵衛佐」の、終わり4文字は、こんにち確認することができない。さらに言えば、敏相が道真の婿であったことを確認する史料も見出されてはいない。なお、「兵衛佐」は、律令制で兵衛府の次官を言い、従五位に相当する。「たちま」は、但馬(現在の兵庫県北部)。「介」とは、「守」の下に位する次官であり、令制において、但馬のようなゆる上国の場合には、従六位上に相当した。「なす」は、任命する、役職に就ける、の意。○たゝにては 何事もなかったうちは。下の「かくとをくながれゆきたる」に照応する。以下、「あはれなること」までが、左遷された男への「女」からの見舞ないし同情の言葉。なお、「ただに」は、形容動詞「ただなり」の連用形で、ここでは、何事も無いさま、いわゆる平時であるさま、を言い表している。○さしもおほえてやみにしを それほどにも思わなかったのだが。左遷前には、「女」が男に温情を寄せることがなかったことをいう。○かくとをくながれゆきたるかあはれなること このように遠国へと流れゆくことになったのがいたわしいこと。「女」は、男の被った「ただ」ごとではない事態に、さすがに同情の思いを禁じ得なかったのである。○いひたりければ と言いつつたところ。「女」は消息をしたためたのである。○かけていへは 心にかけておっしゃるから。概して「口に出して言う」となどと訳されるが、実詠に即してみるかぎり、たとえば『源氏物語』は「少女」巻、源氏が「少女子も神さびぬらし天つ袖ふる

き世の友よはひ経ぬれば」と詠んだのに対する五節の返歌「かけていへば今日のことと思はゆる日蔭の霜の袖にとけしも」のように、「ことよせておっしゃるものだから」と解される場合と、「かけていへばゆゆしきものを万代と契りしことやかなはざるべき」（後撰・卷第十六・雑二・一一四六／大輔）のように、「心にかけておっしゃるから」と解される場合との、いずれかであると考えられる。ここは後者に準じ、「女」が消息を寄越してくれたのを承けて、かく詠み起こしたのである。○泪の川の 涙川の。「泪の川」は、涙がとめどなく溢れ流れるさまを「川」に見立てた誇張表現である。いま男は、絶対的な負をかこつ状況下に「女」の温情に触れ、その涙とどめがたいのである。○みをはやみ 水脈の流れが速いので。「みを」は、水脈・漣。川や海で、水が深く流れて道のようになっているところ。「はやみ」は、形容詞「はやし」の語幹「はや」に接尾語「み」が接続したもの。いわゆるミ語法で、「…ので」と、順接で原因・理由を表す文節を形成する。なお、「みを」はしばしば、「水脈」と「身を」を掛ける、と説かれるが、『万葉集』における「みをはやみ」は、たとえば「松浦舟騒く堀江の水脈速み梶とる間なく思ほゆるかも」（卷第十二・三二七三）などのほか悉皆「水脈速み」のみの意味を成し、当歌においても、「身を」から「はやみ」へと承接する場合の意味の形成を認めがたい。「みを」を慣習的機械的に掛詞とすることは避けるべきであろう。○こころづからや 自発的に。「こころづから」は副詞で、自分の心から、自分の意志で、といった意を表す。「や」は間投助詞。語調をととのえ、意味を強める。○またはなかれむ 今度は流れるつもりだ。「または」は、副詞「また」に強調の係助詞「は」が付いたかたちで、前件の繰り返しながらも後件が相反的な関係で並行しているさまを表す。次は、今度は、といったニュアンスである。「ながれむ」は、「流れむ」で、「む」の文法的意味は意志。上の「心づから」との意味上の呼応関係を形成する。尤も、「なかれむ」の文字列については、「流れむ」と「泣かれむ」との掛詞と捉える向きもある。しかしながら、「泣かれむ」の「れ」を自発、「む」を推量と見るかぎり、上の「心づから」との意味上の聯絡を滑らかに形成し得まい。「流れむ」のみでの文脈を読み取るべきであろうとの判断に立つゆえんである。

（七）志いと深き男のことなど

- また、人数^{ひとかず}ともせぬに、志^{こころ}いと深き人、そひて言ひける文おこせけれど、返事^{かへりごと}もせざりければ、
17. 山^{やま}賤^{しづ}は言へどもかひもなかりけり山彦^{やまひこ}空に我が答^{こた}へせよ

なほ返事もせざりければ、「飽^あかねど、『啓^{けい}せよ』
とも言ひ放て」と言へりければ、

- また、（女の方では）恋愛の対象とは全く思ってもいないのに、
（この女への）執着心のたいそう深い男が、うるさく言い寄った手紙をよこしたけれども、（女が）返事もしなかったのも、
17. 山人^{さんじん}のような私が手紙を出したとて、峽^{かき}ならぬ効^{かた}（甲斐^{かい}）など、まったく無いのであった。（せめて）山彦^{やまひこ}よ、空にこだまして、私の気持ちに應えてほしい。

（女は）やはり返事もしなかったもので、（男が）「思いは満たされ

18. 否^{いな}諾^なとも言ひも放たず憂^{うれ}きものは身を心ともせぬ世なりけり

かかるに、時の大臣流されたまふ。婿にて、兵衛佐より但馬介^{たぢまのすけ}になされて流されるを、「ただにてはさしもおぼえでやみにしを、かく遠く流れゆきたるがあらはれること」と言ひたりければ、かけていへば涙の川の水脈^{みづ}早み心づからやまたは流れむ

(八)「みつ」と名づけた男

をなし女としへていふともなくいはすともなくよはふを返事もせさりければこゝらのとし月になりぬれとなとかみつとものたまはぬといへりければたゝみつとのみそいへりけるそれよりこの女をみつとそついたりけるをとこそせたりける

立かへりふみゆかさらははまちとり跡みつとたに君いはましや

返し
年へぬることおもはすは濱千鳥ふみとめてたにみへき物かは

夏^{なつ}のいとあつき日さかりにおなし人

夏の日にもゆるおもひのわひしきはみつにひとりのねをのみそ鳴返し

いたつらにたまる泪の水ならはこれしてけてといはましものを

ないけれども、(せめて)『御息所様に申し上げよ』とでも明言してほしい」と言つたところ、(女は、)

18. だめですとも、わかりましたとも、はつきりとは言えず、つらいのは、この身を心のままにもできないわたしの身の上そのものなのでした。

こうしているころに、時の大臣が、配流される。その婿で、兵衛佐から但馬介に落とされて流された男に対し、(女は)「事が起くるまえには、さほどのことも思わないでおりましたが、このように遠くへ流れていつてしまったのは同情に堪えないことで、…」と言ひ送つたところ、

19. 心にかけてお言葉をかけてくださるから、あふれる涙の川の水脈がせつかくこんなに速いので、自分の意志で今度は流れてゆこうと思います。

○をなし女 同じ女が。伊勢に比定される、一貫して作中の主人公たる「女」のことである。なお、構文的には、あとの述部「返事もせさりければ」の主語を成す。○としへて 数年に及んで。何年も。下の「よばふを」に掛かる文脈を形成する。○いふともなくいはすともなく 求婚するともなく、しないともなく。「いふ」は、

求愛する、求婚する、の意。○よはふを 言い寄る男に対して。「よはふ」は、求婚する、言い寄る、の意。男性が女性を求めて呼びかける行為である。なお、「よはふ」の後に「男」を補い得ると読む。「を」は、対象を表す格助詞と見る。○返事もせきりければ 返事もしなかったところ。「女」には、男の「いふともなくいはずともな」き態度に真剣味が見出せなかった、ということなのであるが、ここまで見來たつたとおり、「女」の男たちに対する拒絶の姿勢は一貫して堅固である。○こゝらのとし月になりぬれと こんなにも長い年月が経ったけれど。前の「としへて」と照応する。なお、「こゝら」は、もと、「こゝだ」で、数多く、たくさん、の意。○なとかみつともたまはぬ どうして「見た」とさえもおっしゃらないのか。「女」からの返事が一向にもらえないので、男は難詰に及んだのである。「とも」は、格助詞「と」+係助詞「も」。○といへりければ と言ってよこしたので。男は書面をもって、長の年月にわたる求愛の事実を盾に、「女」の返事を懇請したのである。なお、「みつ」は、「見つ」(＝「見る」の連用形+完了の助動詞「つ」と解すべき文脈である。○た、みつとのみそいへりける 「女」は、ただ「見た」とだけ言い返したのであった。「女」は「女」でやはり書面をもって、男の懇望にも、なんとも無機表的層的に、ただだ「みつ(見つ)」の二文字を返したというのである。○それよりこの女をみつとそつたりける 男はそれ以降、この女に対して「みつ」とあだ名をつけたのであった。男は、その振舞いが腹に据えかねたか、「女」にあだ名をつけずにはいられなかったのであろう。○をとこそせたりける 男が送って寄こした歌。底本の「をこそ」は、連綿と書写された「を」「こ」「せ」の文字列のうち、特に「こ」から「せ」への流れを誤認し、誤写した結果であろう。「をこそ」は、歴史的仮名遣いに従えば「おこそ」。果たして、釈文では「おこせたりける」とした。○立かへり 繰り返す。何度も。『全釈』や『新大系』の解する「折り返し」では、千鳥の生態を汲み上げ得まい。○ふみゆかさらは 浜辺の千鳥が幾度も砂浜を踏んで行くように、何度も自分からの文が行くことがなかったならば。「ふみ」は、「踏み」と「文」とを掛ける。○はまちとり 浜千鳥。浜辺の千鳥の。一首の腰の句にあつて、基底としての歌意の、まさに要諦を成す。砂浜を行き来して踏み跡を残すその生態が表象されて、と言うべきか、ここでは直後の「跡」を導く枕詞的用法として機能している。○跡みつとたに 浜千鳥の足跡ではないが、私の筆跡を見たときさ。『跡』は、足跡の意と筆跡の意とを掛ける。「みつ」に、男みずからが「女」につけたあだ名を詠み込む、とされるが、注ないし指摘としての必要性・適格性はいかが。こゝはむしろ直截的に「見つ」の意のみを汲み上げたうえで、「だに」に留意したい。なんとも素っ気なく「見つ」の二文字のみの返事を送られたことへのいわば返報として、自分が文を送り続けていなかったならば、その二文字さえあなたは返せなかったではないかと男は「女」に迫るのである。○君いまましや あなたは言えただろうか、言えなかったに違いない。男は憤懣を残しながらも、というより憤懣あるがゆえに、「女」からの返事があつた事実を逆手にとるかのように、とまれ和歌の世界においては、自分が文を出し続けたことで「女」が屈したのだと、おのがいわば粘り勝ちを氣取^{きど}つてみせているのである。「まし」は反実仮想。「や」は反語。『伊勢集』に「見ず聞かずあらましときは倭文機^{しづた}の経緯^{たてぬき}乱る思ひせましや」(三六八)。

○返し 返歌。「女」から男への答歌である。○年へぬることおもはずは 年月が経つたことを思わなければ。時の経過のなかで何通もの文を出し続けたとい

う自らの行為ないしその根底にあったおのが熱情の持続に男が拘泥^{こどわ}つたのに対し、「女」は時の経過したという事実、ただそれだけの次元に留めようとするのである。「ずは」は打消の仮定条件を表す語法。「置く霜の曉起きを思はずは君がよどのに夜がれせまじや」(後撰・卷第十三・恋五・九一四／よみ人しらず)など。

○濱千鳥 浜千鳥が。贈歌と同じ腰句で、用法もまた同じ枕詞的なそれによって「ふみ」を導く。○ふみとめてたに 浜千鳥が足跡を留めるように、文を手許に留め置いてさへも。『全注釈』は「文を手許に置いてまでして」との釈義を示すが、いかが。言うまでもなく、「だに」は程度の軽いものをあげて、より重いものの存在を類推させる語であつてみれば、「…までして」はあたるまい。そもそも男からの文を手許に留め置く気などさらさら無いのだが、仮に留め置く場合でさえも、といったニュアンスであろう。「ふみとめ」は、「浜千鳥」の縁語「踏み留め」に、「文留め」を掛ける。○みへき物かは 見る必要のあるものであろうか、いや、あるまい。「みへき」は「見べき」。「べし」は上二段活用の連用形にもついた。「あさなけに見べき君としたのまねば思ひたちぬる草枕なり」(古今・卷第八・離別歌・三七六／龍)など。「ものかは」は反語を表す。「見えもせぬ深き心をかたりては人に勝ちぬと思ふものかは」(後撰・卷第十八・雜四・一二七八／伊勢)など。○夏のいとあつき日さかりに 夏のたいそう暑い日盛りに。○おなし人 同じ男が。20番歌を詠んだ男である。○夏の日に この暑い夏の日同様に。○もゆるおもひの あなたへの、この燃えるような思いの火が。「もゆる」は「燃ゆる」。「おもひ」の「ひ」に「火」を掛け、「燃ゆる」はその「火」の縁語。「消えずのみ燃ゆる思ひは遠けれど身もこがれぬる物にぞありける」(後撰・卷第十三・恋五・九九〇／よみ人しらず)など。○わひしきはやるせなくつらいのは。切なく苦しいのは。「人しれずいはぬ思ひのわびしきはただに涙のぬらすなりけり」(貫之集・第五・六三三)など。○みつにひとりの水乞鳥のように。底本本文「みつに」の「に」の字母は「尔」だが、「こ」(字母「己」)↓「に」(字母「二」)↓「に」(字母「尔」)と辿ったか。いま仮に原姿を「みつこひとり」であつたと見ておく。「水乞鳥^{みづこが}」は、赤翡翠の異称。水を切に欲しながら、水に映る自身の真つ赤な体が炎に見えて近づけず、雨露を口に受けて渴きをしのぎ、いつも水恋しと鳴いているという。「みつ」に「水」と、男が「女」につけた渾名「みつ」とが掛かる。○ねをのみそ鳴 水乞鳥が水を求めて声を立てて鳴くように、「みつ」を求めて声をあげて泣くばかりだ。「音^{おと}」鳴くは「水乞鳥」の縁語。「音をなく」は、声をあげて泣くこと。「忘らるる時しなければ葦鶴の思ひ乱れて音をのみぞなく」(古今・卷第十一・恋歌一・五一四／よみ人しらず)など。○返し 返歌。ふたたび「女」から男への答歌である。○いたつらに 無駄に。むなしく。『伊勢集』に「おく露をなに飽かずとていたつらに涙をさへも流しいづらん」(二五六)。○たまる泪の水ならは袖にたまる涙という水があるならば。「ならば」がやや熟さないが、『平中物語』の伝える歌体「いたつらにたまる涙の水しあらば…」と同意と見てよいだろう。贈歌の「水乞鳥」の乞う「水」を承けて、「女」はあえて、「涙」という「水」を持ち出すのである。○これしてけてと これを使って消しなさいと。消すのは、むろん、男の「わびしき」「ひ」である。すなわち「女」には、そんなににつらく苦しいのなら、燃やしていたとて何ら甲斐のない火など早々に消してしまえばよいのに、との思いがあるのである。「して」は、手段・方法ないし材料を示す格助詞。「けて」は、「消す」の意の四段活用の動詞「消つ」の命令形である。

○いはましものを 言いましょうに。実際は、そんな涙は一滴も出ないので、「これして消て」とは言つてやれない、という理窟である。むろん、男への痛烈な当てこすりである。

(八)「みつ」と名づけた男

同じ女、年経^へて、言ふともなく言はずともなくよばふを、返事もせざりければ、「ここの年月になりぬれど、などか『見つ』とものたまはぬ」と言へりければ、ただ「見つ」とのみぞ言へりける。それより、この女を、「みつ」とぞつけたりける。男、おこせたりける。

20. 立ち返りふみゆかざらば浜千鳥^{はまちどり}あ^と見つとだに君いはましや

返し、

21. 年経^へぬること思はずは浜千鳥ふみとめてだに見べきものかは

夏のいと暑き日^{ひざか}盛りに、同じ人、

22. 夏の日に燃ゆる思ひのわびしきはみづこひどりの音^ねのみぞなく

返し、

23. いたづらにたまる涙の水ならばこれして消^けてといはましものを

同じ女が、何年にもわたつて、求婚するでもなくしないでもなく言い寄る男に対して、返事もしなかったところ、「長い年月を経ましたが、なぜ『手紙を』見た』とおっしゃつてくれないのか」と言つてきたので(女は)ただ「見た」とだけ返事をした。それ以来、(男は)この女のことを「みつ」と名づけたのであった。その男が送つてきた(歌)、

20. 浜千鳥が繰り返し砂浜を踏んでゆくように私からの手紙^{ふみ}が繰り返しあなたのもとへ行くことがなかったならば、浜千鳥の足跡ならぬ私の筆跡を「見た」とさえもあなたはおっしゃらなかったに違いありません。

(女の) 返歌、

21. お手紙をいただき始めてから何年も経つたという事実を慮らなければ、浜千鳥が砂浜に足跡をとどめるようにあなたの手紙を手許にとどめるということをしてさえも、見る必要などなかったと思います。さすがに何年も経つたので、しかたなく手許にとどめ見たまでのことすわ。

夏のとても暑い日中に、同じ男が、

22. 暑い夏の日、熱い恋の炎燃えさかる我が思いがつらいのは、水乞鳥が水を求め声を張り上げて鳴くように、今こうしてあなたを恋うて声をあげて泣くばかりであることです。

(女の) 返歌、

23. むだにたまる涙という水があるならば、「これで、あなたがつらいとおっしゃるその思いの炎を消しなさい」と言つてさしあげるのですが…。わたしからは、そんな涙の一滴も出ません。悪しからず…。

(九) 帝の寵愛と皇子誕生

かういふ人／＼の事をもきかてみやつかへをのみしけるに時のみかとめしつかはせたまひけりよくそけしからぬ人のことをきかさりけるとみづからもおもふをやなともいふほとにはらみにけりとこきみをそうみたりけるわか心いとうれしとおもひけりつかうまつるみやす所はきさきにゐたまひぬうみたる子はかつらといふ所にきて雨のふるひうちなかめてゐたりければみやのよみてたまはせたる

月のうちのかつらの人をおもふとや雨になみたのそひてふるらむ

御返し、

久かたのなかにおひたるきみなれば光をのみそたのむへらなる

○かういふ人／＼の事をもきかて このように言い寄る男たちのことをなど聞き入れもせず。 「かう」は「かく」のウ音便形。「かう言ふ」とは、10ゝ22番歌のやりとりと与つてきた男たちそれぞれの、「女」への接近のありようを指す。「も」は強調。「きかて」は、「聞かで」。「女」は一連の男たちのいずれとも男女の関係になることを断固として拒絶してきたというのである。○みやつかへをのみしけるに 宮仕えだけをしていたところ。「女」は温子の許への出仕に鋭意専心したのである。○時のみかと 当代の帝が。冒頭を「いづれの御時にかありけむ」と始発せしめていた本テキストは、ここで、かく当帝を前面に押し立てる。それは、史実に照らせば宇多天皇に比定される「時のみかと」が、「女」の人生に重大に関わってくるがゆえの文法である。○めしつかはせたまひけり 召し寄せて寵愛なされた。「女」は、いわゆる召人になったのである。「召人」とは、男女関係を有する女房の謂いである。○よくそけしからぬ人のことをきかさりけると よくぞ感心しない男たちのことを聞き入れなかったこととよ。 「女」は、果たして帝の寵愛を受けることになったおのが人生史を、感慨深く顧みているのである。○みづからもおもふ 自身でも思う。「女」は、人生の途上で男たちに靡かなかったことを是として自任するのである。○をやなともいふほとに 親なども口の端にのぼせていると。 はるか作品の冒頭で、「女」すなわち鍾愛の娘の、最初の「を」とこへの心寄せに対し、「すくせ」と諦観しつつも、「わかき人はたのみがたきものを」と吐露せずにはいらなかった「をや」の、事実上の快哉というべきだろう。○はらみにけり 懐妊したのであった。帝が「めしつかは」したゆえの、当然と言えば当然の成りゆきであろう。○をとこきみをそうみたりける 他でもない男君を生んだのであった。「女」は皇子を生んだのである。「ぞ」の強調に留意したい。なお、史実として伊勢が子を儲けたことは、『拾遺集』五四二番歌「なき人の形見と思ふにあやしきはゑみても袖の濡るるなりけり」(麗景殿宮の君)の詞書「伊勢の御息所生みたまつりたる親王のなくなりけるが、描き置きたりける絵を藤壺より麗景殿の女

御の方に遣はしたりければ、この絵返すとて」などによって知られる。○わか心というれしとおもひけり 自分の心の中で、とても嬉しいと思ったのであった。「女」は、帝との間に皇子を生み得たことの喜びを、独り嘯みしめたのである。○つかうまつるみやす所は お仕えしている御息所は。言うまでもなく、温子のことである。○きさきにゐたまひぬ 皇后におなりになった。「きさき」は后。皇后ないし中宮。「ある」は、(皇后などの) 位に就く、の意。温子は、『日本紀略』寛平九年七月廿六日条に「天皇御^三南殿」。以^三先皇皇太夫人班子女王^三為^三皇太后^三。從三位藤原朝臣温子為^三皇后^三。」「扶桑略記」同日条に「立^三皇太夫人温子^三為^三中宮^三。」と見え、醍醐天皇の受禪に伴い、皇太夫人(天皇の母)となり皇后ないし中宮を称したことが知られる。○うみたる子はかつらといふ所にきて 生んだ皇子は桂という所に置いて。「かつら」は、桂。山城国葛野郡、現在の京都市西京区、桂川西岸の地名。当地には、古来、多くの莊園が成立、貴紳の別荘も営まれた。「女」所生の皇子は、あるいはその桂にあった「女」の親の別邸にて育てられたということか。○雨のふるひ 雨の降る日に。「降雨は、悲しみの涙を表象する」(『全注釈』)。○うちなかめてゐたりければ 物思いに沈んでぼんやりと外をみやっていたところ。「うちながむ」は、明らかに沈んだ様子でぼんやりと外界を見やるさまを表す。○みやのよみてたまはせたる 後の宮が詠んで女にお与えになった歌。後の宮は、うち沈む「女」を案じて、歌をもつて問いかけたのである。○月のうちのかつらの人をおもふとや 月の中に生えているという桂、その名と同じ桂という所にいる人を思いやるとか。「月のうちのかつら」は、諸書に見える中国の古伝に基づく。夙に『万葉集』に湯原王の「目には見て手には取らぬ月のうちの桂のごとき妹をいかにせむ」(六三二)がある。月には桂樹が存するという伝承によるその表現は、よつて「月のうちの」は既に枕詞的に機能して「かつら」を導いているとも捉え得よう。さらに「かつらの人」と連なるに及んで、「かつら」は当然に掛詞として、樹木の名辞から土地のそれへと変換される。「桂の人」は、言うまでもなく、いま桂の地にあって「女」側の何人かによつて養育されているはずの皇子のことである。○雨になみたのそひてふるらむ 雨に涙が加わって降っているのだらう。御息所は、この日の雨には、遠地の我が子をしのお悲しみの涙が含まれているのでは、と「女」を氣遣ったのである。なお、「雨に涙が添う」という発想は、2番歌「涙さへ時雨に添ひてふるさは紅葉の色も濃さぞ増される」にもあった。○御返し 御返歌。「女」から御息所への返しの歌である。「御」は御息所への敬意を表す。○久かたのなかにおひたるきみなれば 月の中に生えている木と同じ名の里で生育している若君なので。「久かたの」は、枕詞としてたとえば「ひさかたの月の桂も秋はなほもみちすればや照りまさるらむ」(古今・卷第四・秋歌上・一九四/忠岑)のように「月」との緊密な聯絡のもとで用いられたが、その「ひさかた」が転じて、月そのものを指すようになった。「ひさかたは手に取るばかりなりにけり雲のあるてふ寺に宿りて」(惠慶法師集・八二)など。「おふ」は「生ふ」で、生える、生育する、の意。「きみ」は、「君」に「木」を響かせるか。○光をのみそたのむへらなる 月の光だけを頼りにしているようだ。「光」は、上の「久かた」との縁で、月の光を指す。「日」を天子の、「月」を後のそれぞれ喩とする時代の認識に従えば、「月の光」はすなわち皇后(＝御息所)の御威光ということになる。「べらなり」は、推量の助動詞「べし」の語幹相当部「べ」に接尾語「ら」が付き、さらに断定の助動詞「なり」が付いて一語として機

能する。初め、平安時代初期の漢文訓読で用いられ、以後はおもに三代集時代の和歌に用いられた。「ひさかたの天つ空にも住まなくに人はよそにぞ思ふべなる」(古今・巻第十五・恋歌五・七五—/元方)など。「…ようだ。…のように思われる。…に違いない。」といった意味合いを形成する。

(九) 帝の寵愛と皇子誕生

かう言ふ人びとのことをも聞かで、宮仕へをのみしけるに、時の帝、召しつかはせたまひけり。よくぞけしからぬ人のことを聞かざりける、と自らも思ふ、親なども言ふほどに、妊^{はら}みにけり。男君をぞ生みたりける。わが心、いとうれし、と思ひけり。仕うまつる御息所^{みきよ}は后にゐたまひぬ。生みたる子は桂といふ所に置いて、雨の降る日、うちながめてゐたりければ、宮の詠みて賜^{たま}はせたる。月のうちの桂の人を思ふとや雨に涙の添ひて降るらむ御返し

25. ひさかたの中に生ひたる君なれば光をのみぞ頼むべなる

(一〇) 帝の出家

かくてみかたとをりたまひて三年といふに御くしおろしたまひて仁和寺といふ所にすみたまふ時／＼きさいの宮をはしましかよふときに後のみやよになくかなしとおほすつかうまつりし人もいみじうかなしとみたてまつりしもとすみ給し所にみかとおはしまして御とききこしめすつかうまつりし君たちなとめしあつめておろしたまふみやの御方よりかくよみてまいらせる

このように言い寄る男たちの言葉も聞かないで、宮仕えにのみ専念していたところ、時の帝が、(この女のことを)召人^{めしやうど}として寵愛なされた。「よくぞ(これまで)感心できない男たちの言うことを聞かなかつたことだ」と、自分も思う、親なども言っているうちに、(この女は、帝の子を)懐妊したのだった。(しかも、なんと)皇子を生んだのだった。(女は)心の中でとてもうれしいと思った。お仕え申し上げる御息所は、皇后におなりになった。産んだ子は桂という所に置いて、(自らは皇后にお仕えしていた)雨の降る日、ぼんやりと物思いにふけていたところ、皇后が詠んで(女に)くださった(歌)、

24. 月に生えているという桂の木、その木の名と同じ桂という遠地に置いてきた子を思いやるからなのか、今日のこの雨にはあなたの涙が加わって降っているのでしょうか。

(女の)こ返歌、
25. 月に生えている木と同じ桂という名の里で成長している皇子ですので、そこでは、月の光、すなわち皇后様の御威光だけが頼りであるに違いありません。

ことのはにたえせぬ露やをくらめや昔おほゆるまとひしたれば

御返し

同

うみとのみまとひのなかはなりぬめりそなからあらぬ君かみゆれば

となむ

○かくて さて。それから。前文を承けて話題を転換する接続詞である。○みかをりたまひて 天皇が退位なさつて。「をり」は、歴史的仮名遣いに従えば「おり」。「位を退く」の意の「降る・下る」の連用形である。宇多天皇は寛平九（八九七）年七月三日、醍醐天皇に譲位した（『日本紀略』）。○三年といふに御くしおろしたまひて 三年という時にご出家なさつて。宇多上皇の落飾は、昌泰二（八九九）年十月廿四日（『日本紀略』）のことであつたから、一類本の伝える「二年といふに」に従うべきところ。ただし、退位の年を入れて数えれば、「三年」にはなる。○仁和寺といふ所にすみたまふ 仁和寺という所にお住みになる。宇多法皇が落飾後、いかほどの時を経ての移御なのか、定め難い。それを明確に伝える史料も無い。○時／＼きさいの宮をはしましかよふときに 時々、皇后の住まいにお通いになる際に。底本を尊重すれば、後の宮が、法皇の許にお通いになる、ということになるが、実態・実情を推すに難があろう。後の、「後のみや」という主体の立ち上げに徴しても、ここは「きさいの宮にをはしましかよふ」の「に」の誤脱と見るに如くはあるまい。なお、「をはしましかよふ」（歴史的仮名遣いに従えば「おはしましかよふ」）は、「男が女の所に通つて行く」の意の「行き通ふ」の尊敬語である。通つた先は、温子が還御した延喜三年八月以降であれば亭子院、それより前であれば朱雀院ということになる。○後のみやよになくかなしとおほす 皇后は、またとなく悲しいこととお思ひになる。「世になく」は、この世にまたとなく、これ以上ないほどに、の意。法体の宇多を迎える皇后温子の悲哀、無量であつたというのである。○つかうまつりし人もいみじうかなしとみたてまつりし お仕え申し上げた女もたいそう悲しいことと拝見したのだった。「つかうまつりし人」は、主人公の「女」である。宇多の法体に対した「後の宮」と「女」、二人の感慨を並立させたのである。「みたてまつりし」の「し」は、過去の助動詞「き」の連体形。いわゆる連体止めで、余情を込めたのである。悲哀が、より強調されることになろう。○もとすみ給し所にみかとおはしまして もと住んでおられた所に、帝がいらして。先の「きさいの宮」が亭子院ならば、ここは「もとすみ給し所」は朱雀院、「きさいの宮」が朱雀院内のかつて上皇が起居した部屋、ということになる。○御とききこしめす お食事を召し上がる。「とき」は、斎。すなわち仏家の食事のことだが、ここは食すのが法皇であることに符節を合わせての用語である。要するに、宇多法皇にとっての「食事」ということである。「きこしめす」は、ここでは、召し上がる、の意。「食ふ」の尊敬語である。○つかうまつりし君たちなとめしあつめて お仕えしていた女房たちなどを召し集めて。「つかうまつりし君たち」は、「つかうまつりし人」を含む、かつて宇多天

皇に伺候していた女房たちである。直後の「など」に忠実に即せば、妃たちも含むことになるのか。○おろしたまふ お下がりをお与えになる。「おろし」は、貴人の飲食物や衣服のお下がりと言う語。「たまふ」は、本動詞で、「与ふ」の尊敬語。お与えになる、くださる、の意。「ここでは陪食させたことを言うか」(『全注釈』)とも。○みやの御方より 後の宮の御部屋から。皇后の御もとから。「みや」は前出(24番歌詞書)のとおり、後の宮のこと。「方」は、ところ、部屋、の意。それに冠せられた「御」は、むしろ、「みや」への敬意を表す。○かくよみてまいらせたる このように詠んで献上した。「かく」とは、次に掲出されるのとおり、とのニュアンスで、実質的に、左の「ことのはに」の詠を導く。「まいらす」は、歴史的仮名遣いに従えば「まゐらす」で、「与ふ」「やる」の謙譲語。差し上げる、献上する、奉る、の意。言うまでもなく、一首の届けられる／届く先に法皇の厳存あるゆえに用いられた措辞である。○ことのはに「言の葉」という葉の上に。「ことのは」は、ことば、文言。また、会話。ここは、今や法体の主上とその主上にかつて仕えた女性たちとの間で交わされる言葉のやりとりを言う。一方で、草木の「葉」を掛ける。○たえせぬ露やをくらめや 絶えることのない露が置いているだろうか。「たえせ」は、サ変動詞「絶えず」の未然形。「絶えず」は、絶える、尽きる、の意。「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形。「露や」の「や」は問投助詞。語調を強め、また韻律を調える。「をく」は、歴史的仮名遣いに従えば「おく」。「置く」で、「葉」とともに、「露」の縁語である。「らめや」は、文法的に不審。あるいは、後世、時代的に弘通するところとなった破格の現れか。正格は、言うまでもなく「らむや」である。「らむ」は現在推量、「や」は疑問を表す係助詞の終助詞的用法である。○昔おほゆる 昔日が思い出される。「昔」は、類語「いにしへ」が当事者とのつながりのない、遠く過ぎ去ったこととして捉えた過去であるのに対し、当事者がふり返って、情景・事柄が思い浮かべられる自身とのつながりのある過去、を指すという。宇多天皇に関わる人びとにとつては、決して忘れようのない、宇多天皇がそこにいた日々、宇多天皇とともにあった日々の出来事のことである。「おほゆる」は下二段活用 of 動詞「おほゆ」の連体形。「おほゆ」は、思い出される、想い起こされる、の意である。「見る人もあらしにまよふ山里にむかしおほゆる花の香ぞする」(源氏物語・早蕨巻／中の君)など。○まとひしたれば 団欒をしていると。「まとひ」は、歴史的仮名遣いによれば「まとゐ」。一般に、「円居」ないし「団居」と当てる。ここでの団欒は、しかし、法体の宇多を眼前にない隣にしているそれである。いったいに「団欒」の語のもつ明るさとは無縁であることに留意したい。○御返し 御返歌。「女」から皇后への返歌である。○うみとのみ まるで海とばかりに。あふれる涙は、「露」というレベルを超えて「海」になるほどであるとするのである。「流れいつる涙の河のゆくすゑはつひに近江のうみとたのまん」(後撰・卷第十三・恋五・九百七十二／よみ人しらず)など。○まとひのなかはなりぬめり 団欒の中はなつてしまひそうだ。「女」は、居合わせる人びとのさらなる涙が場にあふれることを予見しているのである。○そなからあらぬ君かみゆれは そうでありながらそうではない主君が目に入るので。「そながらあらぬ君」は、間違いなく宇多天皇でありながら、しかし同時にかつてと等号で結び得ぬ僧形の宇多天皇を言う。「みゆれ」は、「見ゆ」の已然形。「見ゆ」は、上一段動詞「見る」の未然形「み」に自発の助動詞「ゆ」が付いたもの。目に入る、見える、意である。「ば」は、直前の已然形

と結びついて、上の「……めり」と推定されるその根拠となる文脈を形成している。○となむと。「…と詠んだ」の含意をとどめる。

(一〇)帝の出家

かくて、帝おりたまひて三年^{みつせ}といふに御髪^{みぐし}おろしたまひて、仁和寺といふ所に住みたまふ。時々^{ときとき}後の宮におはしまし通ふ時に、後の宮、世になく悲し、とおぼす。仕うまつりし人も、いみじう悲しと見たてまつりし。もと住みたまひし所に帝おはしまして、御齋^{とぎ}きこしめす。仕うまつりし君たちなど召し集めて、下ろしたまふ。宮の御方より、かく詠みてまゐらせたる。

26. ことのはにたえせぬ露や置くらむや昔おぼゆるまどゐしたれば

27. 海とのみまどゐのなかはなりぬめりそながらあらぬ君が見ゆればとなむ。

(一一)皇子の死

このみかにつかうまつりてうみたりし人はうみたてまつりしきみやつになりたまふとしようせたまひにければいみじうかなしとおもふにもおろかにおほゆればさらにいふかひなしなむとおもふにもしなれぬよるひるなくほとにみつとついたりし人のもとよりいひをこせたりける

おもふよりいふはおろかになりぬればたとへていはむことのはそなき

さて、帝が退位されて三年後に、御剃髪なさつて、仁和寺という所にお住みになる。時どき、皇后のお住まいに通つておいでになる時に、皇后は、(法体の帝を見て)この上なく悲しいとお思ひになる。お仕え申し上げた人びとも、たいそう悲しいと拝見するほかなかった。もと住んでいらつしやつた所に帝がおいでになつて、お食事を召し上がる。お仕え申し上げた女性たちを召し集めて、お下がりをお与えになる。皇后の御もとから、このように詠んでお届けした(その御歌)、

26. 互いに交わす言葉という葉の上に、絶えることのない涙という露が置いているでしょうか。主上ご在位中の昔を想い出さずにはいられない集いをしていらつしやると。

(女の)ご返歌、

27. 涙があふれて、露どころか海とばかりに集いの中はなつてしまひそうです。主上でありながら主上ではない、出家姿の主上を目のあたりにしますと。

と(申し上げた)。

とあれはさらにものおほえて返事せすかへるとしの五月のあか月郭公の鳴をきゝてひとりこちける
しての山こえてきつらむほとときす恋しき人のうへかたらなむ

○このみかにつかうまつりてうみたりし人は この帝にお仕えして皇子を生んでいた女は。「つかうまつる」は、「つかふ（仕ふ）」の謙譲語。ゆらい、下二段活用動詞「つかふ」の連用形「つかへ」に謙譲の補助動詞「まつる」が付いた「つかへまつる」がウ音便化した語。お仕えする、お仕え申し上げる、の意。「人」は、言うまでもなく、本作の主人公たる「女」のことである。なお、この「人は」、あとの「いみじうかなしとおもふにも」を述部とする構文である。○うみたてまつりしきみ 自身がお生み申し上げた若君が。「きみ」は、「女」が、宇多天皇に比定される「時の帝」の寵愛を受けて産んだ皇子のことである。なお、この文節から次の「ければ」までが、いわゆる挿入句である。○やつになりたまふとしようせたまひにければ 八歳におなりになる年に亡くなってしまわれたので。一類本では、五歳の時とする。○いみじうかなしとおもふにも ひどく悲しいと思うにつけても。「いみじうかなし」は、わが子を喪った「人」すなわち「女」の苦衷である。○おろかにおほゆれば その表現では言い尽くせず、不十分に思われるので。「おろかに」は、「おろかなり」の連用形。「おろかなり」の「おろ」は、「おろそか（疎か）」の「おろ」と同じで、隙間が多く疎略である意。ここでは表現について、それでは言い尽くせず不十分であるさまをいう。すなわち、みづからがいま抱えている心の内は、「いみじうかなし」などという言葉ではとうてい置き換えられないという認識を「女」が持っていることがここに示されたのである。○さらにいふかひなし 全く、どうしようもない。「さらに」は、1・10番歌の詞書に既出。「いふかひなし」は、動詞「いふ（言ふ）」の連体形「いふ」に名詞「かひ（効・甲斐）」と形容詞「なし（無し）」が複合して成った語。「いふ」は声に出して言葉を口にする意、「かひ」はするだけの値打ち、相応の効果の意、「なし」は打消の意を表す形容詞。よって、「いふかひなし」は、そもそも、言っても効果がない意。言い表しようがない。言ってもなんにもならない。言葉は心に及ばないとする言語表現の限界を知悉する「女」の心緒が、書き手（語り手）をとおして吐露された恰好である。○しなむとやおもふにもしなれぬ 死んでしまおうと思っても死ねないのだった。「しなむ」は、「死なむ」。ナ変動詞「しぬ（死ぬ）」の未然形＋意志の助動詞「む」の終止形。「や」は間投助詞。語調を整え、また強める。「しなれぬ」は、「しぬ」の未然形＋可能の助動詞「る」の未然形＋打消の助動詞「ず」の連体形。最後はいわゆる連体止め。余情を含み、また発する。○よるひるなくほとに 一日中、泣いていると。「ほとに」は、時が経過するなかで動作が継続してゆくさまを表す。○みつとつけたりし人のもとよりいひをこせたりける 「みつ」とあだ名を付けた男の人のところから言っつてよこした歌。この「人」は、20番歌詞書で『みつ』とぞつけたりける」とされた男で、一般には平貞文に比定される。「いひをこせ」は、歴史的仮名遣いに従えば、「いひおこせ」である。○おもふよりいふはおろかなりぬれば 心に思うよりも口に出して言うほうが表現として不十分になってしまうので。歌をとおして表明された、この男の言語表現に係る認識が、「女」

の先に示されたそれと全く同断であることに留意したい。○たとへていはむことのはそなき　なぞらえて言えるような言葉などないことだ。「たとふ」は、別のことにたとえて言い表す意。心の輪郭やありよう、内実といったものを擬ることのできる言葉など存在しない、というのである。○とあれは　と詠まれているので。「とあれど」ではないことに注意したい。○さらにものおほえて返事せず　いっそう物事の判断はつかず返事はしない。「女」は、男の率直な弔慰表明の一首を介して、おのが悲痛苦悶の大きさに改めてさいなまれ、ますます忘我の状態に陥ったのである。男の歌が「女」の心を動かさなかったということではあるまい。むしろ、「女」に悲嘆の深きをいよいよ知らしめ、分別をますます失わしめる契機となったがために、「女」が返歌に及ぶことはなかったのである。○かへるとしの五月のあか月　次の年の五月の夜明け近く。五月のとある日の、ということか。「かへる」は、季節や年月がふたたびめぐりくる、の意。「あか月」は、「暁」。「明時」の意の「あかとき」が変化した語。夜明け前のまだ薄暗いころ。○郭公の鳴をきゝて　ほととぎすが鳴くのを聞いて。「郭公」は、ほととぎす。宛てられる漢字は、ここの「郭公」のほか、「杜鵑」「時鳥」「不如帰」など多様。その鳴き声は古くから賞美され、和歌にも数多く詠まれた。すでに『万葉集』において一五三例、『古今和歌集』では四二例を数えることができる。生態的には、初夏に渡来して山里に住み、初秋には南方へと去る鳥だが、「當時の通念では、四月は山里にしのび音に鳴き、五月は人里に飛来して梢で声高く鳴く」（『全注釈』）とされた。「（四月）つごもりの日、女／ほととぎす世にくれたるしのび音をいつかは聞かん今日も過ぎなば／（…）／しのび音は苦しきものをほととぎす木高き声を今日よりは聞け」（『和泉式部日記』）。ここでの「五月」も、そうした通念と打ち合う。○ひとりこちける　独り、つぶやいたのであった。「ひとりごつ」は、独り言をいう、つぶやく、の意。○しての山　死出の山を。「死出の山」は、冥土にある、人が死後にたどって行くという険しい山。「死出の山越えにし人をしたふとて跡を見つものなほまどふかな」（源氏物語・幻巻／光源氏）など。○こえてきつらむほととぎす　越えて来たのであろうほととぎすよ。当時、ほととぎすは、あの世とこの世とを往復する鳥、ともされていた。「なきかへる死出の山路のほととぎす憂き世にまよふわれをいざなへ」（相模集・五四二）など。○恋しき人のうへ　恋しい人のことを。「うへ」は、ここでは形式名詞的に用いられており、その人やそのこと。その人の身の上。「女」が追慕してやまぬ、亡き皇子のことである。○かたならむ　語ってほしい。「なむ」は終助詞で、他者に対する希望の意を表す。「女」は、この世では金輪際会うことのかなわぬ皇子の、かなわぬがゆえの、いまが知りたいのである。

（一一）皇子の死

この帝に仕うまつりて生みたりし人は、生みたてまつりし君、八つになりたまふ年、失せたまひにければ、いみじう悲しと思ふにも、おろかにお

この帝にお仕えして（皇子を）生んだ女は、生み申し上げた皇子が八歳におなりになる年にお亡くなりになったので、たいへん悲しいと思うにつけても、どんな言葉も追いつかないほどに思われるので、（その悲しみは女には）まったく言い表しようもない。

ほゆれば、さらに言ふかひなし。死なむと思ふにも死なれぬ。夜昼泣くほどに、「みつ」とつけたりし人のもとより言ひおこせたりける。

28. 思ふより言ふはおろかになりぬればたとへて言はむ言の葉ぞなき

とあれば、さらに物おぼえて、返り事せず。

返る年の五月のあかつき、ほととぎすの鳴くを

聞きて、独りごちける、

29. 死出の山越えて来つらむほととぎす恋しき人のうへ語らなむ

(二二)比類なき後の宮

いまはをとこを心うかりてみやつかへをなむしけるきさいの宮の御心かきりなくなまめきたまうて世にたとふへくもあらすなむおはしましけるこの人さうしには前栽をめしうへてなむすみける秋さとにまかて、あるにかの宮よりなとかまいらぬま

いれはなさかりもすきぬまつむしもなきやみぬめりとのたまはせたりければ御返りにきこえさする

松虫もなききやみぬなる秋の、にたれよふとてか花みにもこむ

御返し
よふとてもねにはきこえて花す、きしひのふにまねく袖もみめりゆる

またまいらする

人もきぬを花か袖にまねかれはいと、あたなる名をやたちなむ

死のうと思っても死ねない。一日を泣いて過ごしていると、(女を)「みつ」と名づけた男のもとから送ってよこした(歌)、

28. 心を言葉は越えられないので、あなたへの同情を禁じ得ない今の私の気持ちを言葉に託し伝えようとしてもその言葉が見つかりません。

とあるので、(女は)ますます何も考えられなくて返事はしない。翌年の五月の(とある日の)夜明け前に、ほととぎすが鳴くのを聞いて、(女が)つぶやいた(歌)、

29. きつと死出の山を越えて来たのであらうほととぎすよ、恋しいあの子のことを語ってほしい。

○いまは 今となつては。新たな時間における「いま」を生き始めた「女」を描く、一種の話題転換の表現とも見做し得る。次の「まつ虫も」歌の詞書とする『全釈』の見解が支持されるところである。○をとこを心うかりて この世の男の存在を嫌がつて。「心憂がる」は、嫌だと思う、つらく思う、の意。○みやつか

へをなむしける 他ならぬ宮仕へをしたのであった。係助詞「なむ」によって、「みやづかへを」を取り立てて言う行文である。「女」は世の男との不本意な、望まぬ関係性の発生を嫌悪し、宮仕へに専心したというのである。○きさいの宮の御心 後の宮のお心のありようは。「きさい」は、「后」。「後の宮」は、むろん皇后・温子に比定される。「心」は、ある人間の精神作用の根源、また、精神の働きを言う。気持ち、情愛、誠意、真心、情け、といった言葉たちに置き換えられるが、当然のことながら、いずれによっても包摂も言表もしきれぬものである。○かきりくなまめきたまうて この上なく心遣いがありでいらして。「なまめく」は、表面上はなにげなく見えるが、心の底に心遣いがある、深い美しさを湛えている、の意。○世に たいそう。ほんとうに。実に、の意。○たとふへくもあらずなむおはしましける 譬えようもなくおいでであった。皇后のお心映えの比類の無さを跡づける表現である。○この人 この女は。作中主体の「女」のことである。前文を承けて、そのような後の宮の下で当の女は、という呼吸であろう。○さうしには 局には。私室には。「さうし」は、曹司。後の宮の許に出仕していた折の「女」の部屋である。○前栽をめしうへてなむすみける 前庭の草木をいかにも趣深く植えて住んでいたのであった。「うへ」は、歴史的仮名遣いに従うことで、「うゑ」と見られようか。とすれば、「めしうゑ」は、「召し植う」の連用形との語彙認定が可能かとも目されるが、「女」の動作に対しての尊敬語「召す」は不審。いま、本文の校訂・改変は不本意ながら、一類本「をかしうゑて」、三類本「おかしうゑて」といった本文状況に鑑み、原姿「をかしうゑて」が転訛したものとかんがえて、仮に釈文のごとくに作った。「めし」の「め」（字母「女」）は、「か」（字母「可」）の草体が転訛したのもあろう。「う」の重点符「゛」は、その転訛に伴って除かれたのもあろう。なお、「前栽」は、前庭に植えた草木、草木を植えた前庭、両意があるが、ここは前者である。○秋 秋に。何年の、あるいは何年頃のそれか、不明というほかはない。○さとにまかてゝあるに 実家に退出していたところ。「さと」は、出仕先に対して言う語。里邸。「まかづ」は、「まかりいづ（罷り出づ）」の変化した語で、「出づ」の謙譲語である。「女」は、何らかの事情により、いとまをとって後の宮の許を去っていたのである。○かの宮より 他ならぬ後の宮から。「かの」は、あの、の意。○なとかまいらぬ どうして帰参しないのか。「なとか」は、副詞「など」に、疑問・反語の意的係助詞「か」が付いて「など」を強めた語。ここでは、文脈から、「どうして…か」と疑問の意を表していると判断される。「まいる」は、歴史的仮名遣いに従えば、「まゐる」。ここは、文脈上、「来」の謙譲語。なお、ここから「なきやみぬめり」までが後の宮の手紙の文言。○まいれ 参上せよ。帰参せよ。「まいれ」は、歴史的仮名遣いによれば「まゐれ」。「参る」の命令形。後の宮は、先ず、強く帰参を促したのである。○はなさかりもすきぬ 花盛りは過ぎた。後の宮は、「女」がみずから「をかしう植ゑ」た「前栽」の花の盛りを毫も楽しむことなく里居を続けている事実を指摘することで、「女」の意識を帰参へと向けさせようとしたのである。○まつむしもなきやみぬめり 松虫も鳴きやんでしまいそうだ。「まつむし」は、こんにちの鈴虫という。秋の訪れにともなって前栽に秋草の花を植え、鳴く虫を放すのが当時の風趣のありようであったことに鑑みれば、この「まつむし」もまた「女」自身がしつらえていたはずで、なればこそ後の宮は、「前栽」につづいて「まつむし」をも引き合いに出すことによって、「女」の意識をなんとか

帰参に向かわせようとしたのである。○とのたまはせたりければ と仰せになったので。「と」の直前までが、文面であったことになる。○御返りにきこえさ
する お返事として申し上げる歌。後の宮からの来翰に、つつしみをもって歌で返事をするのである。○松虫もなききやみぬなる秋のゝに「待つ」の名を持
つ松虫も鳴きやんでしまうと聞く、しかも、わたしのことなどとうに「飽き」ている秋の野に。「松虫」には「待つ」が、「秋」には「飽き」が、それぞれ掛かる。
言うまでもなく、後の宮からの文にあった「まつむしもなきやみぬめり」の文言を受けての上の句である。○たれよふとてか花みにもこむ 誰が呼ぶからといっ
て花見など行くことがあるのか、行くはずもない。「よぶとてか」の「か」は、反語。「こむ」は、「来む」で、ここでの「来」は、「行く」に同じ。「む」は、
意志を表す。「女」は、要するに、帰参拒否の意向を明確に示したのである。○御返し ご返歌。後の宮は、なおも「女」に帰参を迫るのである。○よふとて
も 呼ぶとしても。呼んでいるとしても。「とて」は、格助詞だが、接続助詞同然の用法で、「…としても」と、逆接の仮定条件を示す。「も」は、強調の働き。
○ねにはきこえて 声には聞こえないけれども。声としては聞こえぬままに。下の「まねく」に掛かる。「ね」は、「音」。声、音声のことである。○花すゝき
花すすきが。下の「まねく」を導く。○しのひに ひそかに。ひっそりと。「秋の野にいでぬとならば花すすきのびにわれを招きやはせぬ」（伊勢集・四五）
など。なお、本文は、「しのふ」と書いた「ふ」を見せ消ちにして、右傍に「ひ」と記す。○まねく袖もみゆめり そなたを招く袖が見えるようだ。「まねく袖」
は、薄の穂が風に揺れるのを、人が袖を振って誰かを招くさまによそえていう歌語。「ふく風になびく尾花をうちつけに招く袖かとのみけるかな」（貫之集・
一二二）など。なお、本文は、「みゆる」と書いた「る」を見せ消ちにして、右傍に「めり」と記す。「めり」は、推定の助動詞。○また ふたたび。「女」は、
先の「松虫も」に引きつづいてさらに返歌に及ぶのである。○まいらする 差し上げる歌。「まいらする」は、歴史的仮名遣いに従えば、「まゐらす」。「与ふ」遣る」
の謙譲語「まゐらす」の連体形である。○人もきぬを花か袖に およそ人が着ることのない尾花の袖に。「きぬ」は、「着ぬ」である。「を花」は、尾花。花す
すきに同じ。「女」は、後の宮の詠に「花すすきのびにまねく袖」とも、また、「みゆめり」ともあったのを承け、しよせんは現に人が招いているのではない、
花すすき＝尾花が風にその穂を揺らしているに過ぎないのだとする認識に基づいて、「人も着ぬ」と詠んだのである。○まねかれは 招かれるとしたら。四段
動詞「招く」の未然形＋受身の助動詞「る」の未然形＋接続助詞「ば」で、仮定条件を示す。尾花に招かれるままに帰参するとしたならば、この意味合いである。
○いとゝあたる名をやたちなむ よりいつそう浮気者だとの評判が立つにちがいない。「いとど」は、いつそう、ますます、の意。「あだ（徒）なる名」は、
浮気者だとの噂、評判、の意。「名を立つ」は、浮き名が立つ、噂を立てられる、の意の成句。「や」は、間投助詞。語調をととのえる。「なむ」は、強意の助
動詞「ぬ」の未然形＋推量の助動詞「む」の終止形。「女」が「いとど」と詠んだあたり、「女」の里下がりないし里居の理由が、「心憂が」っていた「男」に
係る噂や評判であったことが暗示されている、と読まれようか。

(一二)比類なき後の宮

今は、男を心憂がりて、宮仕へをなむしける。
後の宮の御心、限りなくなまめきたまうて、世に
たとふべくもあらずなむおはしましける。

この人、曹司には前裁をかしう植ゑてなむ住み
ける。秋、里にまかでてあるに、かの宮より、「な
どかまゐらぬ。まゐれ。花ざかりも過ぎぬ。松虫
も鳴きやみぬめり」とのたまはせたりければ、御
返りにきこえさする、

30. まつ虫も鳴きやみぬなるあきの野に誰呼ぶとてか花見
にもこむ

御返し、

31. 呼ぶとても音^ねには聞こえて花すすきのびにまねく袖
も見ゆめり

またまゐらする、

32. 人も着ぬ尾花が袖にまねかればいとどあだなる名をや
立ちなむ

(一三)後の宮の死

つねになやましのみしたまひけるをつるにみな月の八日になむかくれたまひにけるあさまじうかなしくてつかうまつりし
人くもさまくにあつまりてよるひるこひなきたてまつるにのちの御わさのくみのいとをなむよりけるしもなる人いとは
よりはてたまひつやいまは何事をかしたまふ雨をなかめてなむこゝには侍といひあけ、れはいとはよりはて、いまはねをな

(女は) 今や男という存在を嫌に思つて、宮仕えを専らにした。
皇后のご情愛は、このうえなくお心遣いに充ちておいでで、ほん
とくに驚えようもなくいらつしやるのであった。

この女は、与えられていた自室には壺庭の草木を風情よろしく
植ゑて住んでいた。秋、実家に退出していたところ、ほかならぬ
後の宮から、「どうして参上しないの。参上なさい。秋草の花盛
りも過ぎました。松虫も鳴きやんでしまひそうよ」とお手紙でおつ
しゃつてよこしたので、お返事として申し上げた歌、

30. 松虫も鳴きやんでしまったという秋の野——こんなわたしになどとう
に飽きて、待ってくれる者としていない所——に、いったい誰が呼ぶか
らといつて花見になど行くことがありましようか、行くはずがありま
せん。

お返事(の歌)、

31. 呼んでいるとしても声は聞こえぬままに、花すすきがひそかにそなた
を招く、その袖が見えるようですよ。

(女が) また差し上げる(歌)、

32. 誰が着ることもない尾花の袖に招かれて行こうものならば、ますます
もって浮薄だという噂がわたしには立つてしまふに違いありません。

むよりあはせてなき侍といひたりければしもの人

よりあはせてなくらむ声をいにして我泪をは玉にぬかなむ

をきつなみあれのみまさる宮のうちに年へてすみしいせのあまも舟なかしたる心ちしてよらむかたなくかなしきに涙のいろはくれなゐもわれらかなかの時雨にて秋の紅葉と人くはおのかちりくわかれなはとまるものとは花す、き君なきやとにむれたちてそらをまねかははつかりのなきわたりつ、よそこにこそみめ

○つねになやましようのみしたまひけるを ふだんから病気がちでおいでだったが。「つね(常)」には、ここでは副詞。ふだんから。日常的に。いつも。「なやましよう」は、「なやまし」の連用形「なやましく」がウ音便化した語。「なや(愼)まし」は、肉体的・精神的に苦しく感じるようすを表す形容詞。「し」は、ある状態になることを意味するサ変動詞「す」の連用形。「なやまし」と「す」との間に「のみ」が投げ入れられていることから、体調のすぐれぬ状態ばかりが恒常的に続いていた、と読める。○つゐに しまいに。とうとう。歴史的仮名遣いに従えば、「つひ(終)」に。「つねに」が、極点を迎えてしまったのである。○みな月の八日になむかくれたまひにける 六月八日にお亡くなりになってしまった。月日が刻まれるのは、たとえば『和泉式部日記／和泉式部物語』では主人公の「女」が宮邸入りを果たした日付が「十二月十八日」と明示されるように、「それがかげかえのない日であった」(『全注釈』)からである。本文では、直後の係助詞「なむ」が、さらにそれを強調する体である。なお、「六月八日」は、史実上は延喜七(九〇七)年のそれで、温子三十六歳であった。○あさましようかなしくて 堪えがたく、悲しくて。「あさまし」の語は、しはしば、「驚き、あきれて」などと訳されるが、いかが。本作の「女」が後の宮の計報に接して「あきれる」ことがあったか、違和が揺曳しはすまいか。『源氏物語』は夕顔巻にも、「あさましよう悲しと思せば」とあるとおり、死をめぐる状況や事柄について、あつてはならないことと捉えて、受け入れがたい、信じがたい、堪えがたいと感じるさまをいうと見てよいのではないか。なお、「あさまし」と「かなし」とは、並立の関係にある。○つかうまつりし人くも お仕えしてきた人びとも。後の宮に仕えていた、それぞれの局に控えていた総ての女房たちも、ということであろう。○さまくにあつまりて それぞれに集まって。「さまく」に「は、形容動詞「さまざまなり」の連用形。「さまざまなり」は、複数のものがそれぞれに別個である意を表す。女房たちの総員がそれぞれの局を出て、そして集うのである。○よるひるこひなきたてまつるに 毎日、恋い慕ってお泣き申し上げて。「よるひる(夜昼)」は、日夜。毎日。「こひなく(恋ひ泣く)」は、慕い泣く、恋しさに泣く、の意。「かの世とともに恋ひ泣く右近なりけり」(『源氏物語』・夕顔)など。○のちの御わさのくみのいとをなむよりける 葬儀後のご法要用の組紐の糸を縫ったのであった。「のち(後)の御わざ(業)」は、初七日・七七日などの法要を言う。ここは、七七日か。「くみのいと(組の糸)」は、組紐の糸。五色の糸をさまざまに縫り合わせたそれは、香机の四隅に垂らすのに用いられたという。○しも

なる人 私室にいる人が。「しも(下)」は、「うへ(上)」の対。宮中などでの中心、すなわち、ここでは「後の宮の居室に対しての控えの間、女房の部屋、をいう。先の「曹司」や「局」に同じである。「なる」は、存在の助動詞「なり」の連体形。「ににいる」の意である。果たして、「しもなる人」は、「女」その人のことである。○いとはよりはてたまひつや 糸は縋りあげなさいましたか。「女」が、亡き後の宮のもとに「集ま」った「仕うまつりし人びと」に向けて問いかけた伝言である。「よりはつ(縋り果つ)」は、縋り終える、最後まで縋る、の意。「つ」は完了の助動詞、「や」は疑問の係助詞の文末用法である。○いまは何事をかしたまふ 今は、どのようなことをなさっていますか。「女」は、「人びと」に、重ねて問いかけたのである。○雨をなかめてなむこゝには侍 雨をぼんやりと眺めてここにあります。「女」は、「人びと」に問いかけたうえで、自身の現況を言い添えたのである。○といひあけ、れは と言上したところ。と申し上げると。「いひあぐ(言ひ上ぐ)」は、(目上の人に)言上する、申し上げる、の意。○いとはよりはて、いまはねをなむよりあはせてなき侍といひたりければ 糸はすっかり縋り終わって、今は声を合わせて泣いております、と言ってきたので。糸を縋り合わすと声を寄り合わすとを掛けるという、言語遊戯による機知をもって、「人びと」は「女」の問いかけに応じたのである。当時の言語遊戯は、今日のいわゆる駄洒落とは断じて等号では結び得ぬ位相にあり、後の宮の許に集いし「人びと」がそうした言語の運用を為し得たと記すことは、そうした「人びと」を抱えて一大後宮を形成していた後の宮その人をさながら顕彰することでもある、という側面を、ここでも描き得ていると読み得るのである。○しもの人 私室の人が。下に、「歌をもつて返した、その歌」との文脈が潜む。「女」は、「人びと」の機知を多として、歌をもつて即応したのである。○よりあはせてなくらむ声を 寄り合わせて泣いている声を。「よりあわせ」は、「縋り合わせ」を当然に響かせる。「なく」は「泣く」。「らむ」は、ここでは婉曲の用法である。○いとにして 糸にして。「いと(糸)」は、あとの「玉」を繋ぎとめる料としての紐である。○我泪をは玉にぬかなむ わたしの涙を玉にして貫いてほしい。掉尾の「なむ」は、他にあつらえ望む意を表す終助詞である。「女」は、みずからの流したいくつもの涙の〈玉〉を、「人びと」の寄り合わせた声の〈糸〉で貫き連ねることを庶幾し、請願したのである。『全注釈』は、「涙の玉を貫きとめることとで悲しみにくれる心が乱れないようにと願うのである」と把握するが、いかが。○をきつなみ 沖の浪が。沖に立つ波さながらに。実景を想起させつつ次の「あ(荒)れ」を導く。○あれのみまさる 日に日に荒れる。荒みつつける。「あれ」は、一般に「離れ」と「荒れ」とを掛けるとされるが、「離れ」に係る文脈は、後段に控える「人々はおのがちり／＼わかれなば」が負うものと読み、ここは「荒れ」のみにとどめて解したい。○宮のうちに 御所の内に。「宮」は後の宮の御所。史実に従えば、亭子院。○年へてすみし 長年にわたって住んだ。「女」が後の宮に仕えつづけてきたことを言う。○いせのあまも 伊勢の海にたつきを得る海人も。「伊勢の海人」は、「女」自身、溯って作者たる伊勢自身をよそえる。「伊勢の海に年へて住みしあまなれどかかるみるめはかづかざりしを」(後撰・卷第十八・雑四・一二七九／伊勢、『伊勢集』二二九)。○舟なかしたる心ちして 舟を流してしまったような思いになり。「舟」は、海においては、海人にとつての拠り所である。後の宮という支柱を失った「女」の、精神の不如意を表現しているのである。よって、『全釈』が説くとおり、直截に「舟」が温子の比喩

となるのではない」と見るべきだろう。○よらむかたなく 頼りにするところもなく。「よる」は、あてにする、頼りにする、の意に、下の「かた」との連関で、近寄る、立ち寄る、の意を響かせる。「む」は、婉曲。「かた」は、場所ないし方面、あるいは方法・すべの意に、「渴」を響かせる。○かなしきに 悲しくて。悲しいうえに。「に」は、接続助詞。○涙のいろはくれなぬも 涙の色が紅とは。「女」の涙は、悲しみのあまり、すでにいわる紅涙、血の涙になったというのである。「も」は、調律であり強調である。○われらかなかの時雨にて 私たちの時雨であつて。後の宮に仕えていた、「女」を含む誰もが、悲涙の果ての紅涙を流すというのである。○秋の紅葉と 秋の紅葉のように。「と」は、…のように、の意。「時雨」が紅葉の色を深く濃く染めてゆくように、「われらがなか」の憂色は深まりゆくばかりなのである。なお、下の「ちりく」を導きつつ、文脈の主語は「紅葉」から「人く」へと遷移してゆくことになる。○人くは仕えた人びとは。いうまでもなく、亡き後の宮に仕えていた女房たちのことである。○おのかちりく わかれなは それぞれ散り散りになつて別れたならば。「時雨」によつて紅葉が乱れ散るように、憂色深まる「宮のうち」から、法要が済めば、女房たちは一人また一人と、紅涙を流しつつ退出してゆくほかないのである。○とまるものとは とどまるものとは。残るものといえは。「紅葉」が散り、「人く」が退き、さて「宮」に残るものは、という措定である。○花すき 穂の出た薄が。下の「むれたちて」ならびに「まねかば」の主語となる。なお、「花すき」は、後の宮が里下がり中の「女」を呼び戻すべく詠った、かの31番歌において用いられていたことを、すべからく想起しておきたい。○君なきやとに 主人のいなくなつてしまつた御所の庭に。「やど」は「屋外」で庭先を、「屋戸」で家ないしその戸口をそれぞれ意味したが、やがて混同され、庭を含めた家を言うようになった。ここは、後の宮の住んでいた「宮」ないしその庭を指す。○むれたちて 群がつて立ち生えて。一群薄が伸びているさまを言うのであろう。○そらをまねかは 空を招くしぐさをしたならば。本二類本における、この後の本文掉尾のありようを見つめるとき、この「しぐさ」こそは、「よそにこそみ」ることになる、その対象であると読むほかはあるまい。その意味でこれは、往時の、31番歌における、事実上の後の宮の動作そのものである、と読み得よう。一類本と大きく径庭するところである。○はつかりの 初雁のように。本長歌劈頭の「沖つ浪」と同断に、実景を想起させつつ次の「なきわたりつ」を導く枕詞的表現とも見られる。○なきわたりつ、 鳴いて渡つてゆくように、泣いて過ごしながら。「なき」は、「鳴き」と「泣き」とを掛ける。○よそにこそみめ 遠くに見ることにしましょう。「女」は、この「宮」を出たあとのおのれを想像し、後の宮亡き後もこの御所を、この御所の庭で風に揺れる花すきを、離れたところからであつても見つけ出てゆくことを、ここに心に誓うのである。

(三) 後の宮の死

つねになやましうのみしたまひけるを、つひに

水無月の八日になむ隠れたまひにける。あさまし

(後の宮は) ふだんから病気がちでいらつしやつたが、ついに

六月の八日に、お亡くなりになつてしまつた。あまりにも受け入

う悲しくて、仕うまつりし人びともさまざまに集まりて、夜昼恋ひ泣きたてまつるに、後の御わざの組の糸をなむ縊りける。下なる人、「糸は縊り果てたまひつや。今は何ごとをかけたまふ。雨をながめてなむここにははべる」と言ひ上げければ、「糸は縊り果てて、今は音をなむ寄り合はせて泣きはべる」と言ひたりければ、下の人、

33. よりあはせて泣くらむ声を糸にしてわが涙をば玉に貫

かなむ

34. 沖つ浪 荒れのみまさる 宮のうちに 年経て住みし

伊勢の海人も 舟流したる 心地して 寄らむ方なく

悲しきに 涙の色は 紅も われらがなかの 時雨にて

秋の紅葉と 人びとは おのが散り散り 別れなば と

まるものとは 花すすき 君なき宿に 群れ立ちて 空

を招かば 初雁の なきわたりつつ よそにこそ見ぬ

(一四)別の出逢いへ

いとみそかに人にあひたりけるを人／やう／いひの、しりけりおとこのかうふりのはこにたまをなむいれたりけるそれかをにたきつせと名のなかるれは玉のをのあひみしほとにくらへつる哉

れがたく悲しくて、お仕えしていた人びとも、それぞれに集まって、来る日も来る日も（後の宮を）慕って泣き申し上げたあとに、葬儀後のご法要用の組紐の糸を縊ったのだった。自室に下がっていった人（＝女）が、「糸は縊り終えられましたか。今は何をしていますか。こちらでは雨をばんやりと見ながら控えております」と（上の女房たちに）言上したところ、「糸は縊り終えて、今は声を寄り合わせて泣いています」と言ってよこしたの

で、自室の人が（詠んだ歌）、

33. みなさまが寄り合わせて泣いているその声を縊り合わせて糸にして、私の涙を玉として貫き通してほしいものです。

34. 後の宮様を喪って、まるで沖の浪のように、荒みゆくばかりのこの御所に、長年住んで仕えた伊勢の海人のわたくしも、海人にとつての掬り所である舟を流してしまったような気持ちが出て、身を寄せるところとてなく悲しくて、すでに紅涙へと移ろった涙は、私たちにとつては時雨であって、時雨が秋の紅葉の色を深くし、さらに散らせてゆくのと同じように、仕えてきた人びとがそれぞれ散りぢりに別れてしまふとなると、残るものはいえは花すすき、ただただだけが主人を失った御所の庭の一隅に集まり揺れて、空に向かって手招きをするならば、初雁が鳴いて渡ってゆくように、わたくしも泣いてこの世を生きながら、よそながらも見守りたいと思います。

○いとみそかに人にあひたりけるを たいそうひそやかに男と契りを結んでいたことを。「みそかに」は、形容動詞「みそかなり」の連用形。こつそりとするようすを表す。「人」については、誰を指し示すか、不明とするほかないが、諸書に示唆されるとおり、敦慶親王の可能性は追究し得るか。ちなみに同親王は、宇多天

皇の第四皇子。同天皇と他ならぬ温子との間に生まれた均子内親王を妻とした。伊勢との交渉は、均子の薨じた延喜十（九一〇）年の翌年あたりから。二人がもうけることになる中務の誕生は、延喜十二（九一二）年頃と推定されている。○人くやうくいひの、しりけり 世間の人びとが、しだいにうるさく噂するようになった。「人く」は、当事者を圍繞する、あるいは当事者と対立する人間たち。「やうく」は、徐々に、だんだん、の意。「いひの、しる」は、言い騒ぐ、騒がしく言う、の意。○おとこの その男が。この「おとこ」は、「女」が「みそかに」「あ」ふに至った「人」のことである。○かうふりのはこにたまをなむいれたりける 冠を収める箱に、なんと玉を入れていたのであった。「かうふりのはこ（冠の箱）」は、男が使用する冠を収めておくための箱。「なむ」は、直前の「たまを」を強調する措辞。なんと、玉を、のニュアンス。「女」には、冠こそが収められていて当然の箱に、意外にも玉を当の男が入れていたことがまさに驚きであり、と同時に、それだけに欣喜される事態であったことが物語られている。なお、末尾の「ける」は、言うまでもなく、上の「なむ」を承けての結びだが、あえて読点で繋いで、「それが」と承けてゆく呼吸と読みたい。○それかをに その玉の紐に。「それ」は、直前の、男が冠の箱に入れていた「たま」を指す。「が」は、連体修飾格のそれで、「の」の意。「を」は、「緒」。玉を貫き留めている紐の謂いであろう。「女」は、その紐に、一首をしたためた紙を結び付けるのである。○たきつせと 激しく流れる早瀬のように。「たきつせ」は、「滾つ瀬」とする説もあるが、「滝つ瀬」、滝のごとき早瀬、の意である。「滝つ瀬の中にも淀はありてふをなどわが恋の淵瀬ともなき」（古今・巻第十一・恋歌一・四九三／よみ人しらず）など。○名のなかるれば 噂が広まったので。「名」は、噂、評判、の意。「噂を広める、評判を立てられる」意の「名を流す」に対し、「名の流る」は、噂が広まる、評判が立つ、の意となる。「滝の音は絶えて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞こえけれ」（公任集・一一九）など。○玉のをの 玉の緒のように短い。「玉の緒」は、玉に通した緒。短い、また切れやすいことから、はかなさの象徴。こは、ほんのわずかの時間を言う。「死ぬる命生きもやするところみに玉の緒ばかりあはむといはなむ」（古今・巻第十二・恋歌二・五六八／藤原興風）など。○あひみしほとにくらへつる哉 自分たちの持った逢瀬の時間に比べてみたことだ。「女」は、男と実際に逢った時間の、極々短かった現実には、噂の、あまりの仰々しさという一方の現実をつき合わせ、嘆いてみせるのだが、そのほんのささやかな逢瀬のなかの、しかし二人のみが知る、いわば珠玉の時間への自負が滲もう。一類本の「あひみしほどを」に対して、本二類本は「あひみしほどに」と、自らの側の逢瀬の時を比較の基点に置いて興味深い。なお、逢瀬の実際と噂の過大という非対称を詠んだ歌に、「逢ふことは玉の緒ばかり名の立つは吉野の川の滝つ瀬のごと」（古今・巻第十三・恋歌三・六七三／よみ人しらず）など。

（一四）別の出逢いへ

いとみそかに人に逢ひたりけるを、人びとやうやう

言ひののしりけり。男の冠の箱に玉をなむ入れたりる、

（女が）たいそう忍んで男と逢瀬を持っていたことを、人びと

がしだいに喧しく噂するようになった。その男が冠の箱に他なら

それが緒に、

35. 滝つ瀬と名の流るれば玉の緒の逢ひ見しほどにくらべ

つるかな

ぬ玉を入れていた、その玉の紐に（女が結びつけた歌）、

35. 激しく流れる早瀬のように噂が広まったので、思わず玉の緒のような

短い逢瀬の時間に比べたことですよ。

四 偶合からの射程——「おわりに」に代えて——

第一節冒頭で触れたとおり、「共通テスト」国語の試行調査はすでに二回目が実施された。その第4問「古文」の出典本文は一回目につづいて再び『源氏物語』。さすがに、再びの異本併記のかたちによる出題ではなかったが、「手習」巻は浮舟の、遍昭詠「たちねのかかれとてしもむばたまの我が黒髪をなですやありけむ」を踏まえてのいわゆる引歌表現「かかれとてしも」をめぐって、問5が立てられた。複数の文章を用いた会話形式の問題、と言ってしまうがそれまでだが、「かかれとてしも」という傍線部に係る教師と生徒との会話や、『遍昭集』からの、和歌を含む引用文を踏まえて、生徒の解釈の中から正しいものを二つ選べとの設問は、試行調査一回目の「問5」が、せっかく異本を含む複数資料を掲げながら、それ相応のものになっていない、との巷間に喧伝された批評・批判に、はしくもか、ぬかりなくもかは知らぬが、ともあれ応えて余りある、と評してよいものではなかったか。

稿者は、二〇一八年度は第二学年の「古典B」において、一般に三巻本で読まれる（ゆえに教科書に載る本文も三巻本を底本とする）『枕草子』を、いわゆる前田本で読むことにした。果たして、たとえば「木の花は」の段は「橘」のくだり、三巻本「花の中より黄金の玉かと見えて……」への、『和漢朗詠集』は具平親王の「枝は金鈴を繫けたり……」に拠る」との注の、むしろ前田本「花の中より黄金の鈴か……」との契合の発見、あるいは「五月ばかりなどに」の段、「蓬」は「うちかかりたる」（三巻本）のか、それとも「かかへたる」（前田本）のかをめぐる議論などなど、比較によればこそその読みの補完や鍛錬に確かに向かい得る、しかも、それこそ生徒たちとの〈対話〉や生徒同士の〈会話〉が現にある、そうした授業の〈いま・ここ〉へのひそやかな愉悦を、じわりと感じつつある。翻って、向後も求められるはずの、同じ事象でも表現によって生じる差異について思考する力、和歌の解釈や複数の文章から必要な情報を抽出して事柄を判断する力は、「共通テスト」の発問形式の如何を問わず、そも「古文」領域の命題であつたはずである。その意味で、異本への挑みは、授業や授業観の更新への意識改革を動機づけるものとして、決して無効ではあるまい、と観じているところである。